

高岡市埋蔵文化財調査概報第63冊

岩坪岡田島遺跡調査概報

－平成16年度、グラスキューブ地区の調査－

2005年3月

高岡市教育委員会

序

高岡市域におきましては、旧石器時代から近世までの埋蔵文化財包蔵地が所在と考えられています。

高岡市教育委員会においては、毎年これらのうちのいずれかに発掘調査を実施しておりますが、次々と明かされていく当地の歴史と対面するたびに、先人たちの残した歴史の深さに感銘を受ける次第です。

本書に報告しますのは、平成16年度に実施した岩坪岡口鳥遺跡「グラスキューブ地区」の本発掘調査成果です。

同遺跡については、東大寺須須加荘の比定地の一つと距離的に近いことから、研究者間において注目をされて参りました。過年度においても数度の発掘調査を実施しましたが、今回は、上記の荘園の存続時期と一部が符合する歴史的様相を検出するという、貴重な成果を挙げることができました。

したがいまして、本書につきましては、当地の歴史を知るうえでも重要な資料になるものと思われます。また、学術調査や郷土の歴史研究などにも、お役立ていただければ幸いに思う次第です。

末尾になりましたが、この調査にご協力をいただきました、関係各位ならびに地元の皆様に、感謝申し上げます。

平成17年3月

高岡市教育委員会
教育長 村井 和

例 言

1. 本書は、株式会社グラスキューブによる事務棟及び倉庫の建設事に伴う岩坪岡田島遺跡の埋蔵文化財発掘調査概報である。
2. 発掘調査は、高岡市教育委員会と株式会社グラスキューブ、そして有限会社山武考古学研究所（所長 平岡和夫）の3者協定を締結し、高岡市教育委員会の指導のもとで有限会社山武考古学研究所が実施した。
3. 今回の発掘調査にかかる担当者は次の通りである。
高岡市教育委員会 根津明義（高岡市教育委員会文化財課主任）
山武考古学研究所 武部喜充 桐谷 優 大橋忠昭（山武考古学研究所副会長）
4. 自然科学分析については御青田生物研究所、藤田秀臣氏に依頼し、出土木製品の年代測定及び樹種同定を行った。
5. 今回の調査で出土した遺物や図面及び写真などの記録類は、すべて高岡市教育委員会が保管している。
6. 現地調査から報告書作成に至るまで次の諸機関の指導及び協力を得た。記して感謝の意を表します。
御芝硝材、御日本テクニカルセンター、高岡市シルバー人材センター
7. 本書の執筆は、第1章を大橋、第5章を根津、その他を武部が行った。

凡 例

1. 遺構実測図などにおける方位はすべて南標北を示す。
2. 本書で使用した遺構記号は次の通りである。
掘立柱建物SB01～、欄列SA01～、小穴P01～、
土坑SK01～、井戸SE01～、溝SD01～
3. 遺物の注記については、岩坪岡田島遺跡の略号「IWO」・出土地点・遺構番号の順を基本とした。
4. 土器実測図の断面表示は須恵器がベタ黒、珠洲が平行斜線、土師器などは白ヌキである。また、内面黒色処理及び縁輪は細粒網点、灰輪の施輪範囲は一点破線で表した。
5. 遺物観察表中の胎土含有物と粒度は各々以下の記号組み合わせによって示した。
a) 含有物は、a（長石）、b（石英）、c（白色針状粒）、d（赤色粒）、e（黒色粒）、f（黒色細粒）
g（角閃石）、h（砂粒）で表し、小文字は少量、大文字は多量を示す。
b) 粒度は、緻密（0.2mm以下）、密（0.3mm～1.0mm）、粗（1.0mm以上）の3段階で表示し、その中間的な様相は「やや」という表現を用いた。
6. 遺物の時期決定に用いた土器編年観は、太宰府白磁碗編年（横川賢次郎・森田勉1978「太宰府出土の輸入陶磁器について一型式分類と編年を中心として」『九州歴史資料館研究論集』4九州歴史資料館普及会）と、珠洲古陶編年（吉岡康暢1994「中世須恵器の研究」吉川弘文館）である。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
日 次	
第1章 序 説	
遺跡概観	1
調査に至る経緯	3
調査の方法	4
調査の経過	4
地形と層序	5
第2章 遺 構	
掘立柱建物及び小穴	7
横列	12
土坑	13
井戸	15
溝	15
第3章 遺 物	
掘立柱建物出土遺物	19
小穴出土遺物	19
土坑出土遺物	20
井戸出土遺物	20
溝出土遺物	20
遺物包含層出土遺物	21
第4章 自然科学分析	23
第5章 結 語	28

挿 図 目 次

第1図	岩坪岡田島遺跡位置図 [1] (1/50,000)	1
第2図	岩坪岡田島遺跡周辺図 (1/15,000)	2
第3図	岩坪岡田島遺跡位置図 [2] (1/150,000)	3
第4図	調査区方眼網設定図 (1/800)	4
第5図	基本層序 (1/10)	5
第6図	岩坪岡田島遺跡調査区位置図 (1/5,000)	6

図 面 目 次

図面01	遺跡全体図 (1/250)、但し、溝SD30・37・38の断面図は (1/150)
図面02	遺構実測図 掘立柱建物SB01・03 (1/100)
図面03	遺構実測図 掘立柱建物SB02・10・11、小穴P210・253・257 (1/100)
図面04	遺構実測図 掘立柱建物SB04・10・11 (1/40・1/100)
図面05	遺構実測図 掘立柱建物SB05・06、小穴P360・367・369 (1/40・1/100)
図面06	遺構実測図 掘立柱建物SB06・07・08、小穴P195・196 (1/100)
図面07	遺構実測図 掘立柱建物SB09・12・13、小穴P301 (1/100)
図面08	遺構実測図 掘立柱建物SB14・15、小穴P173 (1/100)
図面09	遺構実測図 掘立柱建物SB16・17、小穴P78・114 (1/100)
図面10	遺構実測図 掘立柱建物SB18・19 (1/100)
図面11	遺構実測図 掘立柱建物SB20、小穴P102・346・364 (1/100)
図面12	遺構実測図 櫛列SA01・02・03、小穴P372 (1/100)
図面13	遺構実測図 土坑SK01～05・08～13・15～17 (1/60)
図面14	遺構実測図 土坑SK18～23・26～28、井戸SE01 (1/60)
図面15	遺構実測図 溝SD02～10・12・14・15・18・19 (平面図1/100、断面図1/60)
図面16	遺構実測図 溝SD11・16・17・20～26・31 (平面図1/100、断面図1/60)
図面17	遺構実測図 溝SD30・32～35、小穴P368 (平面図1/100、断面図1/60)
図面18	遺物実測図 掘立柱建物SB02・05・08・09・13・14・15、小穴P78・114出土遺物
図面19	遺物実測図 小穴P173・195・196・210・257・301・369、土坑SK17・21・22・28出土遺物
図面20	遺物実測図 井戸SE01、溝SD02・05・06出土遺物
図面21	遺物実測図 溝SD09・11、遺物包含層、表土層出土遺物
図面22	遺物実測図 遺物包含層、表土層出土遺物
図面23	遺物実測図 遺物包含層、表土層出土遺物
図面24	遺物実測図 遺物包含層、表土層出土遺物
図面25	遺物実測図 遺跡内出土土錘 (掘立柱建物SB10P10・SB20P7、小穴P253・346、土坑SK22、溝SD02・11、遺物包含層、表土層)

図 版 目 次

図版01	遺跡写真	遺跡全景（上空から）
図版02	遺構写真	1. 遺跡遠景（南東上空から） 2. 掘立柱建物SB01完掘状況（北から）
図版03	遺構写真	1. 掘立柱建物SB02完掘状況（東から） 2. 掘立柱建物SB03完掘状況（東から）
図版04	遺構写真	1. 掘立柱建物SB04完掘状況（北から） 2. 掘立柱建物SB05・06完掘状況（北から）
図版05	遺構写真	1. 掘立柱建物SB07完掘状況（北から） 2. 掘立柱建物SB10・11完掘状況（東から）
図版06	遺構写真	1. 掘立柱建物SB16・19完掘状況（東から） 2. 掘立柱建物SB20、横列SA02・03完掘状況（北から）
図版07	遺構写真	1. 掘立柱建物SB10柱穴P10遺物出土状況（東から） 2. 掘立柱建物SB14柱穴P10柱根出土状況（東から） 3. 小穴P360栗石出土状況（北から）
図版08	遺構写真	1. 小穴P195遺物（17）出土状況（東から） 2. 井戸SE01土層堆積断面（南から） 3. 井戸SE01完掘状況（北から）
図版09	遺構写真	1. 土坑SK28遺物出土状況（西から） 2. 掘立柱建物SB01発掘調査状況（東から） 3. 掘立柱建物SB02発掘調査状況（南から）
図版10	遺物写真	掘立柱建物SB02・05・08・09・13・14・15、小穴P78・114・173・195・196・210・257出土遺物
図版11	遺物写真	小穴P301・369、土坑SK17・21・22・28、井戸SE01、溝SD02・05出土遺物
図版12	遺物写真	溝SD06・09・11、遺物包含層、表土層出土遺物
図版13	遺物写真	遺物包含層、表土層出土遺物
図版14	遺物写真	遺物包含層、表土層出土遺物
図版15	遺物写真	遺跡内出土土錘（掘立柱建物SB10P10・SB20P7、小穴P253・346、土坑SK22、溝SD02・11、遺物包含層、表土層）及び製塩土器

表 目 次

表 1	放射性炭素年代測定の結果	25
表 2	¹⁴ C年代を暦年代に校正した年代（範囲）結果	25
表 3	遺物観察表（1）	30
表 4	遺物観察表（2）	31
表 5	遺物観察表（3）	32

第1章 序 説

遺跡概観

「岩坪岡田島遺跡」は、高岡市街地北西部、JR高岡駅からは北西約4.6kmの地点に位置する。遺跡の北西側一帯には西山丘陵が連なり、対する南方では富山平野の主要河川の一つである小矢部川が蛇行する傍ら、主要地方道小矢部伏木港線と能越自動車道が同河川とともに南西方向から北東方向へと走る。また、遺跡の周辺はやや複雑な地理的様相を呈しており、岩坪岡田島遺跡そのものは、小矢部川により形成された沖積低地をはじめ、標高9～10mを測る微高地・丘陵・間河谷の計4地形を縦断する。

上記した主要地方道小矢部伏木港線の沿線付近には、延喜式段階の古代北陸道がはしっていたとされる。近世以降は北陸街道の脇往還である水見往来や山根道が通り、現在の高岡市佐加野の地には佐加野駅がおかれ、小矢部川の水運と共に交通の要衝として機能した。遺跡の西方の丘陵斜面には須川城ヶ平横穴墓群がある。昭和57年に土砂採掘中に発見され、昭和57年度から2箇年にわたり発掘調査が行なわれた。同横穴墓群は20基からなり、出土遺物により飛鳥時代を中心に築造されたものと考えられている。平成10～12年度にも調査が行われ、新たに3基の横穴墓を確認した。

周辺を流れる須川川（外古川）の西側には、弥生時代～中世にかけて営まれた間尺遺跡がある。天王山式土器ないし東日本系の弥生土器が検出されたことで知られる。この背後の丘陵上には、倉谷古墳群をはじめ、安居山古墳群や四十九古墳群などが所在する。当遺跡の北西側約2kmには須田藤の木遺跡があり、岩坪岡田島遺跡の周辺と同様に、東大寺領須加莊の比定地の一つに数えられている。

なお、岩坪岡田島遺跡については、平成10年度の能越自動車道建設に伴う分布調査や試掘調査を経て、新たに命名されたものである。また南西側の沖積低地では、手洗野赤浦遺跡が新規に確認されている。



第1図 遺跡位置図〔1〕(1/50,000)



212. 板屋谷内B古墳群 213. 板屋谷内C古墳群 214. 岩坪岡田島遺跡 215. 須川城ヶ平横穴墓群 218. 須川古墓
 219. 滝ヶ谷内I遺跡 220. 滝ヶ谷内II遺跡 221. 明田I遺跡 222. 間尽遺跡 223. 手洗野赤浦遺跡 225. 安居山
 古墳群 226. 四十九古墳群 227. 倉谷古墳群 228. 道ヶ谷内遺跡 229. 道ヶ谷内I遺跡 230. 道ヶ谷内II遺跡
 231. 道ヶ谷内III遺跡 230. 宮田遺跡 235. 月野谷大谷内遺跡 236. 立山古墳群 237. 高辻遺跡

第2図 遺跡周辺図 (1/15,000) 『高岡市遺跡地図』より転載

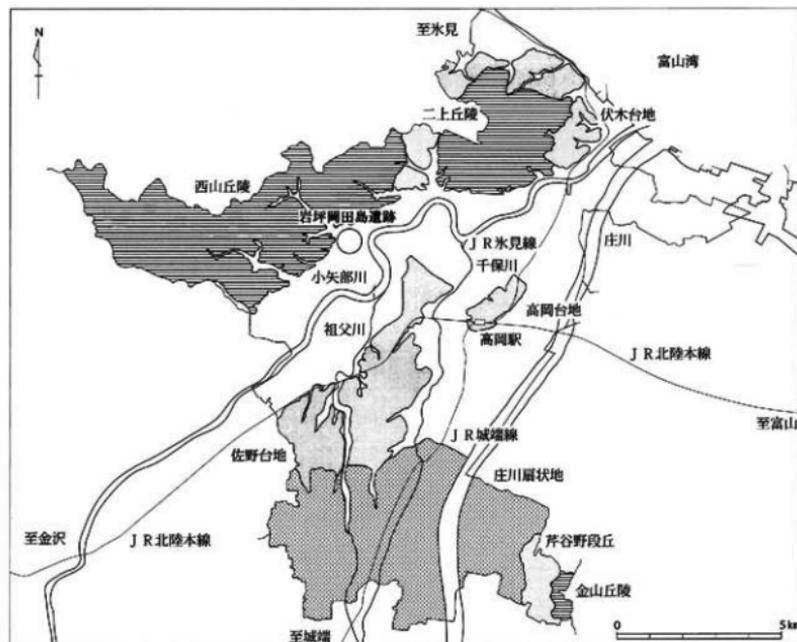
調査に至る経緯

今回の発掘調査は、平成15年7月に株式会社グラスキューブによる事務棟及び倉庫の建設が計画され、同建設予定地における埋蔵文化財の取扱について、同社から高岡市教育委員会あてに照会が寄せられたことに端を発する。

しかし、当該地は岩坪岡田島遺跡の包蔵地として周知されていたことから、開発行為を行う際には事前に埋蔵文化財の有無を確認するとともに、その所在が明らかとなった場合には、何らかの方法でその保護措置を行う必要性があった。

これを受け、高岡市教育委員会と株式会社グラスキューブとの間で協議の場がもたれ、平成15年10月から試掘調査を実施することで合意に至った。試掘調査は平成15年10月1日から同年10月8日まで高岡市教育委員会が実施したが、その結果、各トレンチから多数の遺構及び遺物が検出されたことから、「富山県発掘調査等対応基準」に照らし、建物の建設部分については本発掘調査を実施する必要があるものと判断された。

この結果を踏まえ、高岡市教育委員会と株式会社グラスキューブとの間に再び協議の場がもたれたが、行政事務とのかねあいのほか、建造物の竣工や営業開始期日などの関連から、前記2者のほか、調査実施業者をくわえた3者協定のもとに本調査を実施することで合意に至った。そして、株式会社グラスキューブによる業者選定及び3者協定の締結を経て、平成16年8月9日から今回の本発掘調査に着手した次第である。



第3図 遺跡位置図〔2〕(1/150,000)

調査の方法

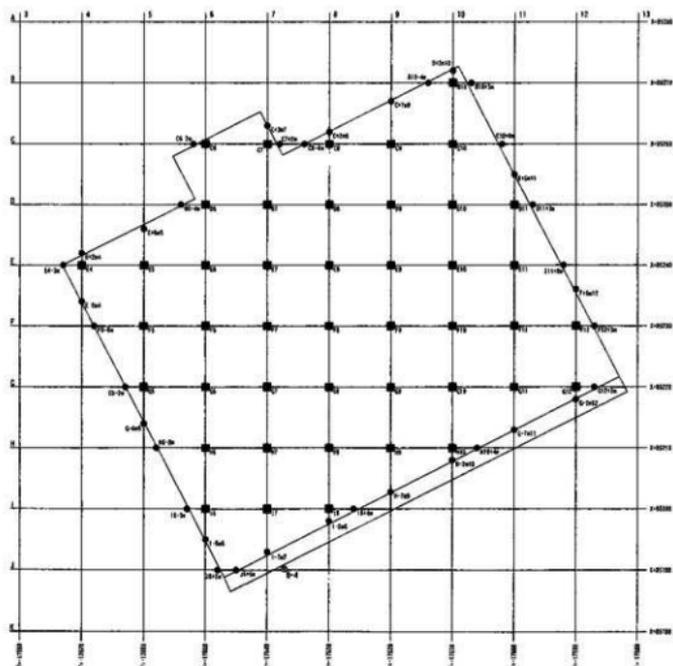
発掘調査は、緊急時と細部調整をのぞき、高岡市教育委員会の作成した仕様書にもとづき山武考古学研究所が実施した。遺構確認面までの掘削のうち、表土については大型重機を用い、遺物を包含する層と遺構覆土の掘削は人力にて実施した。遺構実測図は土層断面図と平面図を作成した。前者については1/20縮尺図を基本とした。後者については航空測量を用いて1/20縮尺の割図と1/100縮尺の全体図を作成した。また、この他にも必要に応じて1/10及び1/40縮尺図を作成した。

写真撮影は35mmのモノクロ及びカラーズライドフィルム・120mmモノクロフィルムのほか、補足的にデジタルカメラを使用した。空中写真については測量会社に委託し、ラジオコントロールヘリコプターを用いて撮影をした。

調査区のグリッドは、世界測地系第Ⅱ系を基準として調査区全体的に10m方眼のメッシュを設定した。各方眼の呼称については、北から南へはアルファベットを、西から東へは算用数字を付し、この交点となる記号を組み合わせた（例：A-1）。

調査の経過

本発掘調査は、平成16年8月9日から同年11月6日までに実施した。8月9日から17日までは、調査区域の設



第4図 調査区方眼網設定図(1/800)

日に従事したほか、現場事務所の設置及び発掘器材搬入などの発掘調査にかかる準備を行った。8月17日から表土除去作業を開始し、これをもって実質的な発掘調査を開始した。8月30日からは遺構確認作業に移行し、調査区を縦断する浅い谷を挟んだ東側に多数の小穴や溝を確認した。遺跡空中撮影は調査の進捗に合わせて3期に分けて実施した。10月28日に最終撮影を実施し、実質的な発掘調査を終了した。

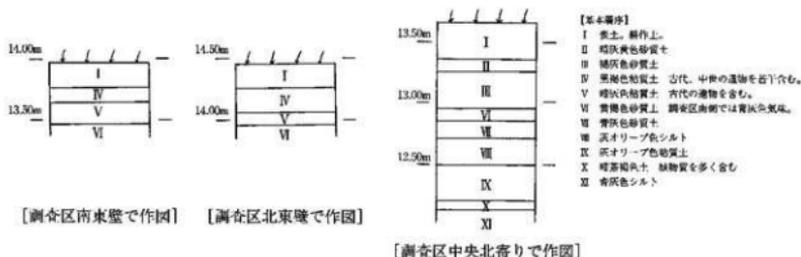
整理調査及び報告書作成作業については、基本的に山武考古学研究所群馬支店で行った。細部をのぞき、こちらも高岡市教育委員会の作成した仕様書にもとづき、洗浄・注記・接合・復元といった一連の作業を行った。

地形と層序

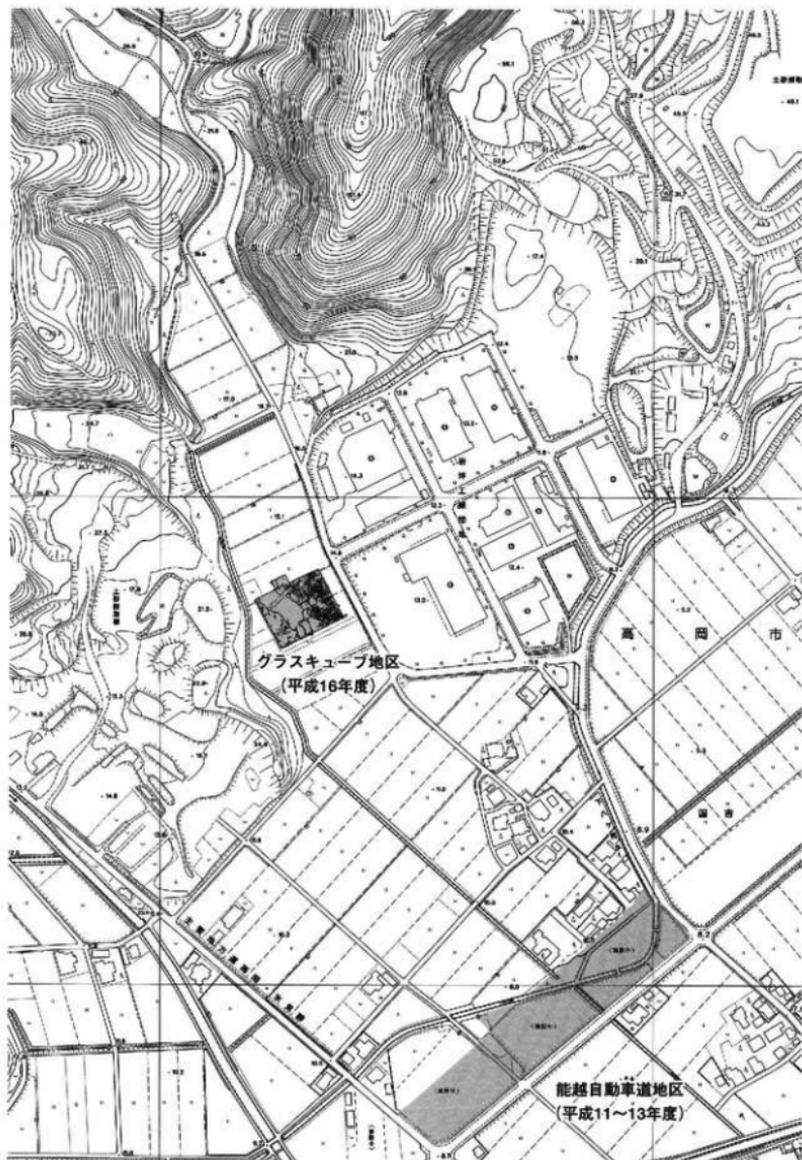
岩坪岡田遺跡そのものは複数の地形上に立地するが、今回の調査区周辺については、前出した西山丘陵に付随する開析谷付近に立地している。現地は調査を開始する直前まで水田として利用され、区画整理の際に整地が行われたものの、大きな地形の改変はなかったとみられる。

基本層序については地点により異なる。調査区東側と西側では表土（耕作土）を最上層とし、以下、黒褐色粘質土層・暗灰色粘質土層の順にそれぞれ20cmほど堆積しており、その直下に地山（基盤層）が現れる。調査区の中央部付近では、表土（耕作土）より下位では、厚さ40cm前後の暗褐色粘質土層と、同20cmの暗灰色砂質土層の順に堆積し、その直下に青灰色砂質土の地山が現れる。ちなみに、地山は青灰色ないし黄褐色砂質土を基本とする。基本的に、谷筋と直行する方面では概ね水平な層序堆積を呈するが、谷筋と平行する側ではその開口部の南側へと向い約3～5°の緩やかな勾配を呈して下る傾向にある。

中世から古代までの遺構の確認面は、下図においてVI層と表記した青灰色及び黄褐色砂質土の上面である。ちなみにIV層とV層中からは中世ないし古代の遺物の出土をみた。



第5図 基本層序 (1/40)



第6図 岩坪岡田島瀧跡調査区位置図 (1/5,000)「高岡市都市計画地図」に一部加筆

第2章 遺構

岩坪岡田島遺跡（グラスキューブ地区）における本発掘調査区においては、1面の遺構確認面から、古墳時代後期・古代・中世といった時代に帰属するものと思われる遺構が検出されている。検出遺構は掘立柱建物20棟（SB01～20）、楯列3条（SA01～03）、小穴300余基、土坑23基（SK01～05・08～13・15～23・26～28）、井戸1基（SE01）、溝30条（SD02～12・14～26・30～35）、である。以下にその概略を記載する。

掘立柱建物及び小穴

調査区中央を縦断する浅い谷を挟んで西側に1棟、東側に19棟で、合計20棟の掘立柱建物が組み立てられた。

とりわけ、建物群の密集した東側は建物どうしの重複が著しく、柱根が違っていたり、半載した土層断面に柱痕跡が観察されたりした小穴に柱筋が通らず、組み立てた建物跡から取り残された小穴が300余基も在り、本書で掲載した建物以外にも何棟か組み立てられるものと考ええる。上記20棟の建物を構造別に分類するならば、側柱構造を早するものが16棟であるのに対し総柱構造の建物は4棟と少ない。これとは別に付属施設という点では、総計20棟のうち庇をもつと考えたもの6棟、建物の外側に溝を付帯するものが4棟検出されているものと思われる。

各建物の規模は、SB02の6間×5間を最大とし、4間×2間が4棟、3間×2間と5間×3間が3棟ずつ、5間×2間が2棟である。

建物の方向は次のAからDまでの4大別を提起したい。A群は真北を基軸としてN-21°-27°-Wを呈するものとした（SB01・02・04・10・12・16・18-20）。また、B群は同N-34°-39°-Wを呈するものとし（SB03・05・06・11・13）、さらにC群は同N-76°-80°-Wを呈するものとする（SB07・08・09・15）。そしてD群についてはN-48°-52°-Wを呈するものとした（SB14・17）。

次に掘方の規模から各建物を概観するならば、上端径40cmを基準としてこれよりも規格の大きいSB01・08・09などの9棟が存在する。上記基準より小規模を呈するのはSB02など11棟である。

また、掘方の平面形状は略円形と楕円形を主とし、方形基調の可能性があるのはSB01のそれだけである。柱根に限定されるものの、柱として丸太材を使用したと思われる20個体が確認されている。多くは下端を粗く調整し、表皮を削いだだけのものとみられるが、小穴P102と小穴P364では丸太分割材が用いられていた。

掘方の基底部からは、栗石及び土鍾をこれに代用したとみられるものが数基確認されている。SB10-P10では扁平な河原石を礎板とし、その直下に2個体の土鍾を栗石の代用とされていた。同様な例としてはSB20-P7がある。一方、これとは別に準大ほどの石を栗石とする小穴P360も特筆される。

掘方の出土遺物を勘案するに今回の調査で検出された掘立柱建物の築造年代は4時期に及ぶものと思われる。SB19は7世紀から8世紀前半、SB01は8世紀後半から9世紀前半、SB08・09など11棟は9世紀後半から10世紀代、SB03・06など6棟は11世紀代から12世紀前半にそれぞれ帰属するものと考えられる。

掘立柱建物SB01（図面2、図版2-9-2）

調査区南西端の谷を挟んだ西側H-6区の平坦面に立地する。建物群の密集した谷の東側とは異なり、西側は本建物1棟のみで他遺構との重複も無い。桁行（南北）3間×梁間（東西）2間の総柱式建物で、棟方向はN-22°-Wを指す。桁行全長5.90m、梁間全長5.20m、柱間は桁行が北から1.90+1.90+2.10mでほぼ7尺等間、梁間には西から2.70+2.50mである。床面積は30.68㎡である。

掘方内に柱根が遺存しているものがP7・8、P10は断面で柱痕のみ確認した。P7・8の柱根は直径26～28cmの丸太材を用い、下端底面は斧で粗く平らに調整している。また、P5・6・11は、土層断面が単層なことから柱抜き取りも考えられる。掘方の規模は大きく、平向形状はいずれも方形基調とみられ、深さは15～43cmで、やや勾配をもって掘り込まれている。掘方埋土は、強い粘性を持つ灰色粘質土を基調に4層に分けられた。掘方内から8世紀後半から9世紀前半の所産である須恵器壺・蓋が出土している。

掘立柱建物SB02 (図面3-18、図版3-1、10、表3)

谷を挟んだ東側の調査区北東側C-9・10、D-9・10区の平坦面に立地する。本建物は遺構群の密集したなかになりに在り、掘立柱建物SB10・11と重複しており、新旧関係は不明である。桁行(東西)6間×梁間(南北)5間の側柱式建物で、北辺と東辺の2面に庇を付設している。棟方向はN-63°-Eを指す。桁行全長11.93m、梁間全長10.08m、柱間は桁行が北から1.62+1.70+1.94+2.35+2.56+2.00m、梁間は西から2.34+1.38+1.34+1.98+2.80mである。床面積は120.25㎡である。

掘方の平面形状は円形か楕円形、掘方は小さめで、深さは9～38cmである。掘方埋土は、粘性を持つ暗灰色粘質土である。掘方内から僅少ではあるが、土師器壺・皿が出土した。うち、10世紀代に比定される底部回転糸切り無調整土師器皿(1)を掲載した。

掘立柱建物SB03 (図面2、図版3-2・9-3)

調査区北東側B-9区の平坦面に立地する。本建物は遺構群の密集したなかになりに在り、溝SD15-17・35と重複しており、いずれも本建物が古い。桁行(東西)3間×梁間(南北)1間の側柱式建物で、南辺に庇を付設する。棟方向はN-56°-Eを指す。桁行全長5.98m、梁間全長2.24m、柱間は桁行が北から1.70+2.20+2.08mである。床面積は13.40㎡である。

掘方の平面形状は円形か楕円形で、深さは17～38cmである。掘方はやや小さめで、ほぼ直に掘り込まれているものが多い。掘方埋土は、径10～30mm大の炭塊を2～3%含む粘性を持つ黒灰色土を基調とし、P9内からはとりわけ大きな径30～50mm大の炭塊が出土した。掘方内から11世紀後半に帰属する土師器柱状高台杯、土師が出土した。

掘立柱建物SB04 (図面4、図版4-1)

調査区北東側B-8・9、C-8・9区の平坦面に立地する。遺構群の密集したなかになりに在り、本建物も溝SD21・22・23・35と重複しており、新旧関係はいずれも本建物が古い。桁行(南北)4間×梁間(東西)1間の側柱式建物で、北辺と西辺の2面に庇を付設している。棟方向はN-25°-Wを指す。桁行全長6.63m、梁間全長2.12m、柱間は桁行が北から1.30+1.74+1.74+1.85mである。床面積は14.06㎡である。

掘方の平面形状は円形か楕円形で、規模は小さめである。深さは15～23cmで、やや勾配をもって掘り込まれている。掘方埋土は、炭を少量含む灰黒色粘質土を主体とする。掘方内から僅少ではあるが、土師器壺・杯が出土している。10世紀代に帰属するとみられる。

掘立柱建物SB05 (図面5-18、図版4-2、10、表3)

谷を挟んだ東側C-7・8、D-7・8区の緩斜面に立地する。本建物は遺構群の密集したなかになりに在り、掘立柱建物SB06と重複している。新旧関係は柱穴の切り合いから本建物が新しいとみた。桁行(東西)5間×梁間(南北)3間の総柱式建物で、棟方向はN-38°-Wを指す。桁行全長10.55m、梁間全長9.46m、柱間は桁行が北から2.06+1.80+1.86+2.55+2.18m、梁間は西から2.85+3.75+2.86mである。床面積は99.80㎡である。

掘方の平面形状は円形か楕円形である。深さは8～37cmで、やや勾配をもって掘り込まれている。掘方埋土は、暗灰色粘質土を主体とする。掘方内から須恵器壺・杯、土師器杯などが出土した。うち、土師器壺(2)と木

製皿(3)を掲載した。11世紀代に属する。

掘立柱建物SB06 (図面5・6、図版4-2)

谷を挟んだ東側D-7・8、C-8区の平坦面に立地する。本建物は遺構群の密集したなかに在り、掘立柱建物SB05と重複しており、新旧関係は柱穴の切り合いから本建物が古いとみた。桁行(東西)2間×梁間(南北)2間の総柱式建物で、棟方向はN-40°-Wを指す。桁行全長6.20m、梁間全長4.35m、柱間は桁行が北から3.15+2.84m、梁間は西から2.18+2.16mである。床面積は27.00㎡である。

P7の掘方内に柱根が遺存していた。柱根は径27cmの丸太材を用い、底面は斧で粗く平らに調整している。柱掘方の平面形状は凹形か楕円形で、掘方は小さめである。深さは10~35cmで、やや勾配をもって掘り込まれている。掘方埋土は、暗灰色粘質土を主体とする。掘方内から遺物は前述の柱根以外は出土しなかった。P7の柱根はAMS法による年代測定の結果、11世紀前半から13世紀前半までの結果が出された。

掘立柱建物SB07 (図面6、図版5-1)

調査区北東側B-9・10区の平坦面に立地する。溝SD14・35と重複し、新旧関係はいずれも本建物が古い。南西端の柱穴は溝SD35に切られて消滅している。桁行(東西)2間×梁間(南北)2間の総柱式建物で、棟方向はN-77°-Eを指す。桁行全長4.25m、梁間全長4.12m、柱間は桁行が北から2.01+2.20m、梁間は西から2.14+2.16mである。床面積は17.51㎡である。

掘方の平面形状は凹形か楕円形で、規模は小さめである。深さは12~32cmで、ほぼ直に掘り込まれている。掘方埋土は、炭を少量含む暗灰色粘質土を主体とする。掘方内から僅少ではあるが、土師器甕が出土している。銅片で図示はできなかったが器形と器面調整から6~7世紀のものと思われるが、流れ込みの可能性もある。

掘立柱建物SB08 (図面6・18、図版10、表3)

調査区北東側D-10、E-10区の平坦面に立地する。本建物は遺構群の密集したなかに在り、掘立柱建物SB09・13や、溝SD11・32と重複している。新旧関係はSB09については不明であり、溝との関係は本建物が古い。桁行(東西)3間×梁間(南北)2間の側柱式建物で、棟方向はN-8°-Eを指す。桁行全長6.49m、梁間全長4.44m、柱間は桁行が北から2.25+2.30+1.75m、梁間は西から1.96+2.50mである。床面積は28.82㎡である。

掘方内で柱根遺存が確認できたのがP1・8・10である。P1の柱根は幅24cm、厚さ17cmの分割材、P8・10は径16~19cm大の丸太材を用いている。掘方の平面形状は凹形か楕円形で、規模は大きい。深さは16~43cmで、やや勾配をもって掘り込まれている。掘方埋土は極暗褐色粘質土を主体とする。

柱掘方内から須恵器甕・杯・蓋、土師器杯が出土した。うち、10世紀代に比定される足長高台土師器杯など3点である。土師器杯(5・6)、須恵器高台付杯(4)を掲載した。また、P10の柱根をAMS法による年代測定した結果、8世紀後半から10世紀後半までの結果が出された。

掘立柱建物SB09 (図面7・18、図版10、表3)

調査区東側D-10区の平坦面に立地する。本建物は遺構群の密集したなかに在り、掘立柱建物SB02・C8や、溝SD11・26と重複しているが新旧関係は不明である。桁行(東西)3間×梁間(南北)3間の側柱式建物で、棟方向はN-14°-Eを指す。桁行全長6.46m、梁間全長6.18m、柱間は桁行が北から2.16+1.92+2.34m、梁間は西から1.86+2.46+2.25mである。床面積は39.92㎡である。

掘方内で柱根遺存が確認できたのがP2・11である。P2の柱根は径24cm、P11は径20cmのいずれも丸太材を用いている。掘方の平面形状は凹形か楕円形で、P7・8を除くといずれも規模は大きい。深さは8~48cmで、やや勾配をもって掘り込まれている。掘方埋土は極暗褐色粘質土を主体とする。

掘方内から須恵器甕・蓋、底部回転切り無調整の土師器杯、製塩土器が出土した。うち、10世紀代に比定さ

れる内面黒色処理土師器杯(7)を掲載した。

掘立柱建物SB10 (図面3・4・25、図版5-2・7-1、15、表5)

谷を挟んだ東側の調査区北東側C-9・10、D-9・10区の平坦面に立地する。本建物は遺構群の密集したなかに在り、掘立柱建物SB02・11と重複しているが新旧関係は不明である。桁行(東西)4間×梁間(南北)3間の側柱式建物で、棟方向はN-63°-Eで、SB02と同じ方向を指す。桁行全長11.64m、梁間全長5.86m、柱間は桁行が北から2.96+3.62+2.52+2.42m、梁間は西から1.95+2.02+1.78mである。床面積は68.21㎡である。

掘方の平面形状は凹形か楕円形で、規模は小さめである。深さは8~32cmで、やや勾配をもって掘り込まれている。掘方埋土は、粘性を持つ暗灰色粘質土を主体とする。掘方内から最少ではあるが、11世紀代に帰属する口縁部内傾の土師器壺や底部回転糸切り飾し無調整の杯が出土した。P10出土の土鍾(106・107)を掲載した。

掘立柱建物SB11 (図面3・4、図版5-2)

谷を挟んだ東側C-9、D-9・10区の平坦面に立地する。本建物は遺構群の密集したなかに在り、掘立柱建物SB02・10と重複しているが、新旧関係は不明である。桁行(東西)5間×梁間(南北)2間の側柱式建物で、棟方向はN-60°-Eを指す。桁行全長10.65m、梁間全長3.96m、柱間は桁行が北から2.04+2.08+1.86+2.14+2.32m、梁間は西から1.98+1.84mある。床面積は42.17㎡である。

掘方の平面形状は凹形か楕円形で、掘方は小さめである。深さは6~37cmで、やや勾配をもって掘り込まれている。掘方埋土は、粘性を持つ暗灰色粘質土を主体とする。掘方内から須恵器壺・杯、土師器壺・杯が出土している。底部回転糸切り無調整で内面黒色処理の土師器杯は10世紀代に比定される。

掘立柱建物SB12 (図面7)

調査区東側B-10、C-10・11、D-10区の平坦面に立地する。桁行(東西)6間×梁間(南北)2+a間の側柱式建物で、棟方向はN-27°-Wを指す。桁行全長14.40m、梁間全長3.16+a m、柱間は桁行が北から1.60+2.52+2.74+3.04+2.58+1.86m、梁間は西から2.00+a mである。

掘方の平面形状は凹形か楕円形で、規模は小さめである。深さは13~32cmで、ほぼ直に掘り込まれている。掘方埋土は、粘性を持つ暗灰色粘質土を主体とする。掘方内から須恵器壺・杯、土師器壺・杯が出土した。底部回転糸切り無調整の土師器杯は10世紀代に比定される。

掘立柱建物SB13 (図面7・18、図版10、表3)

調査区東側D-10・11、E-10・11区の平坦面に立地する。本建物は遺構群の密集したなかに在り、掘立柱建物SB08・14・15や、溝SD32と重複しているが、新旧関係は不明である。桁行(東西)3間×梁間(南北)2間の側柱式建物で、棟方向はN-56°-Eを指す。桁行全長7.90m、梁間全長5.23m、柱間は桁行が北から2.70+2.74+2.28m、梁間は西から3.05+2.10mである。床面積は41.32㎡である。

掘方の平面形状は凹形か楕円形で、規模は大きめである。深さは16~44cmで、やや勾配を持って掘り込まれている。掘方埋土は、径10~30mmの炭塊を2~3%含む極暗褐色粘質土を主体とする。掘方内から土師器壺・杯、裂壊土器などが出土している。内面黒色処理及び足長高台の土師器杯は10世紀代に比定される。古墳時代後期の手捏ね土器(8)と製塩土器(9)を掲載した。

掘立柱建物SB14 (図面8・18、図版7-2、10、表3)

調査区東側D-11、E-11区の平坦面に立地する。本建物は遺構群の密集したなかに在り、掘立柱建物SB13・15や、溝SD32と重複している。新旧関係より本建物が古い。桁行(東西)5間×梁間(南北)2間の側柱式建物で、棟方向はN-52°-Wを指す。桁行全長10.36m、梁間全長4.76m、柱間は桁行が北から1.92+2.38+1.70+2.45+1.98m、梁間は西から2.38+2.32mである。床面積は49.31㎡である。

掘方の平面形状は円形か楕円形で、規模は全体的に大きめである。深さは10～50cmで、やや勾配を持って掘り込まれている。掘方埋土は、径5～20mm大の炭塊を2～3%含む極暗褐色粘質土を主体とする。掘方内から土師器壺・杯、製塩土器などが出土した。10世紀代に比定される足長高台の土師器杯(10)と土師器壺(11・12)を掲載した。

掘立柱建物SB15(図面8・18、図版10、表3)

調査区南東側E-11区の平坦面に立地する。本建物は遺構群の密集したなかに在り、掘立柱建物SB13・14と重複しているが新旧関係は不明である。桁行(東西)3間×梁間(南北)2間の側柱式建物で、棟方向はN-77°-Wを指す。桁行全長8.43m、梁間全長5.20m、柱間は桁行が北から2.62+2.98+2.84m、梁間は西から2.46+2.65mである。床面積は43.84㎡である。

掘方の平面形状は円形か楕円形で、規模は全体的に大きめである。深さは18～41cmで、やや勾配を持って掘り込まれている。掘方埋土は、径5～10mm大の炭塊を1%程含む極暗褐色粘質土を主体とする。掘方内から土師器壺・杯が出土した。底部回転糸切り無調整の土師器杯は10世紀代に比定される。

掘立柱建物SB16(図面9、図版6-1)

調査区南東側E11、F-10・11区の平坦面に立地する。本建物は遺構群の密集したなかに在り、掘立柱建物SB17や、溝SD03・05・07・31・33と重複しており、新旧関係は溝より本建物が古い。桁行(東西)5間×梁間(南北)3間の側柱式建物で、棟方向はN-59°-Eを指す。桁行全長10.06m、梁間全長6.40m、柱間は桁行が北から1.35+2.74+1.45+2.10+2.52m、梁間は西から1.60+2.24+2.15mである。床面積は64.38㎡である。

掘方の平面形状は円形か楕円形で、規模は全体的に大きめである。深さは12～40cmで、やや勾配を持って掘り込まれている。掘方埋土は、径5～10mm大の炭塊を1%程含む極暗褐色粘質土を主体とする。掘方内から須恵器壺、土師器壺・杯が出土した。底部回転糸切り無調整の土師器杯は10世紀代に比定される。

掘立柱建物SB17(図面9)

調査区南東側F-11・12区の平坦面に立地する。本建物は遺構群の密集したなかに在り、掘立柱建物SB16・18や、溝SD04・05と重複しており、新旧関係は本建物が溝より古い。桁行(東西)4間×梁間(南北)2間の側柱式建物で、棟方向はN-42°-Eを指す。桁行全長6.88m、梁間全長4.50m、柱間は桁行が北から1.60+1.54+2.00+1.72m、梁間は西から2.70+1.52mである。床面積は30.96㎡である。

掘方の平面形状は円形か楕円形で、規模はバラツキがある。深さは8～33cmで、やや勾配を持って掘り込まれている。掘方埋土は、径5～10mm大の炭塊を1%程含む極暗褐色粘質土を主体とする。掘方内から須恵器壺・杯、土師器壺・杯が出土した。内面黒色処理や底部回転糸切り無調整の土師器杯は10世紀代に比定される。

掘立柱建物SB18(図面10)

調査区南東側F-11・12、G-11・12区の平坦面に立地する。本建物は遺構群の密集したなかに在り、掘立柱建物SB17、溝SD03・05と重複している。新旧関係は溝SD05よりも本建物のほうが新しい。またSD03は掘立柱建物SB17の付帯溝と考えられ、いずれも本建物のほうが古い。桁行(東西)3間×梁間(南北)2間の側柱式建物で、棟方向はN-21°-Wを指す。桁行全長5.90m、梁間全長4.41m、柱間は桁行が北から1.90+2.20+1.86m、梁間は西から2.16+2.24mである。床面積は26.02㎡である。

掘方の平面形状は円形か楕円形で、規模は全体的に大きめである。深さは10～48cmで、やや勾配を持って掘り込まれている。掘方埋土は、径5～10mm大の炭塊を1%程含む極暗褐色粘質土を主体とする。掘方内から須恵器壺・杯、土師器壺・杯が出土した。底部回転糸切り無調整の土師器杯は10世紀代に比定される。

掘立柱建物SB19 (図面10、図版6-1)

調査区南東側F-10区の平坦面に立地する。本建物は遺構群の密集したなかに在り、掘立柱建物溝SD02・12と重複しており、新旧関係は本建物が古い。桁行(東西)4間×梁間(南北)2間の側柱式建物で、棟方向はN-21°-Eを指す。桁行全長8.20m、梁間全長4.28m、柱間は桁行が北から1.98+2.35+1.75+2.02m、梁間は西から2.30+2.12mである。床面積は35.10m²である。

掘方の平面形状は円形か楕円形で、規模はバラツキがある。深さは12~46cmで、やや勾配を持って掘り込まれている。掘方埋土は、径5~10mm大の炭塊を1%程含む極暗褐色粘質土を主体とする。掘方内から7世紀~8世紀前半に比定される土師器壺・杯が出土した。

掘立柱建物SB20 (図面11・25、図版6-2、15、表5)

調査区南東側F-9・10、G-9区の平坦面に立地する。本建物は遺構群の密集したなかに在り、溝SD08と重複しており、新旧関係は本建物のほうが新しい。桁行(東西)5間×梁間(南北)3間の側柱式建物で、棟方向はN-29°-Eを指す。桁行全長8.82m、梁間全長5.96m、柱間は桁行が北から0.84+2.40+1.32+1.35+2.70m、梁間は西から1.70+2.55+1.65mである。床面積は51.95m²である。

掘方の平面形状は円形か楕円形で、規模は全体的に大きめである。深さは18~41cmで、やや勾配を持って掘り込まれている。掘方埋土は、径5~10mm大の炭塊を1%程含む極暗褐色粘質土を主体とする。掘方内から須恵器蓋、土師器壺・杯、製塩土器が出土した。底部回転糸切り無調整の土師器杯は10世紀代に比定される。土師(104)を掲載した。

本建物に付帯する溝SD09が、本建物東側をコの字形に囲むように廻る。出土遺物は10世紀代のもので占められる。なお、詳細は溝の項目による。

構 列

構列SA01 (図面12)

調査区北東側B-9、C-9・10区の平坦面に立地し、直線的に小穴列が並ぶ。掘立柱建物SB02の北側に在り、柱穴列方向はN-60°-Eを指し、構列全長11.40m、間隔は西から0.42+1.60+2.12+3.20+2.00+0.95+0.92mである。掘方の平面形状はいずれも円形基調とみられ、平面規模は小さめで、深さは6~23cm、やや勾配をもって掘り込まれている。掘方埋土はやや粘性を持つ暗灰色土を基調とする。掘方内からは遺物は出土しなかった。また、相互の位置的なことから掘立柱建物SB02の庇の可能性も考えられる。

構列SA02 (図面12、図版6-2)

調査区南東側E-9、F-9・10区の平坦面に立地し、直線的に柱穴列が並ぶ。掘立柱建物SB20の東側に在り、小穴列方向はN-30°-Wを指し、構列全長7.68m、間隔は西から2.08+1.30+1.30+1.20+0.96mである。掘方の平面形状はいずれも円形基調とみられ、平面規模は小さめで、深さは6~30cm、やや勾配をもって掘り込まれている。掘方埋土は強い粘性を持つ灰色粘質土を基調とする。掘方内からは遺物は出土しなかった。

構列SA03 (図面12、図版6-2)

調査区南東側E-9、F-9・10区の平坦面に立地し、コの字状に柱列が並ぶ。掘立柱建物SB20の北側に在り、小穴列方向はN-39°-Wを指し、構列全長18.66m、間隔は西から1.54+3.26+2.54+1.40+1.74+2.04+1.65+2.16+0.88+1.45mである。掘方の平面形状はいずれも円形基調とみられ、平面規模は小さめで、深さは10~31cm、やや勾配をもって掘り込まれている。掘方埋土は、強い粘性を持つ灰色粘質土を基調とする。P2掘方内に柱根が遺存していた。柱根は表皮を剥いだ直径19cmの丸太材を底面だけ斧で粗く平らに調整している。また、

掘方内から9～11世紀代の土師器甕・杯が出土した。相互の位置的なことから溝SD10を付帯する建物の可能性も考えられる。

土 坑

今回の調査区では総計28基の土坑の掘削を試みた。このうちSK06・07・14・24・25の5基については、近・現代のものであることが整理調査段階で判明したため、本書では残りの23基のみを掲載することとした。

土坑SK01 (図面13)

調査区南西側のI-6区の平坦面に立地する。平面形は長方形、断面形は逆台形である。規模は、長軸84cm、短軸62cm、深さ12cm、長軸方向はN-55°-Wを指す。埋没土は炭を含む黒褐色粘質土を主体に3層に分層される。出土遺物は10世紀代に比定される土師器甕・杯の細片である。

土坑SK02 (図面13)

調査区南西側のI-6区の平坦面に立地する。平面形は楕円形、断面形は碗形である。規模は、長軸55cm、短軸43cm、深さ9cm、長軸方向はN-26°-Wを指す。埋没土は炭を含む黒褐色粘質土を主体に2層に分層される。出土遺物は無い。

土坑SK03 (図面13)

調査区南西側のI-6区の平坦面に立地する。平面形は楕円形、断面形は逆台形である。規模は、長軸49cm、短軸44cm、深さ8cm、長軸方向はN-29°-Wを指す。埋没土は炭を含む灰褐色粘質土を主体に2層に分層される。出土遺物は無い。

土坑SK04 (図面13)

調査区南西側のI-7区の平坦面に立地する。平面形は不規則な楕円形、断面形は逆台形で、底面に凹みがある。規模は、長軸119cm、短軸55cm、深さ14cm、長軸方向はN-79°-Eを指す。覆土は炭を含む褐色粘質土を主体に3層に分層される。出土遺物は無い。

土坑SK05 (図面13)

調査区南西側のH-6区の平坦面に立地する。平面形はほぼ方形、断面形は逆台形である。規模は、長軸62cm、短軸57cm、深さ14cm、長軸方向はN-76°-Eを指す。覆土は炭を含む黒褐色粘質土を主体に4層に分層される。出土遺物は無い。

土坑SK08 (図面13)

調査区南西側のI-5区の平坦面に立地する。平面形は楕円形、断面形は逆台形である。規模は、長軸62cm、短軸58cm、深さ14cm、長軸方向はN-68°-Eを指す。覆土は暗褐色砂質土の単層である。出土遺物は無い。

土坑SK09 (図面13)

調査区南西側のH-5区の平坦面に立地する。平面形は長方形、断面形は逆台形である。規模は、長軸95cm、短軸50cm、深さ23cm、長軸方向はN-25°-Wを指す。覆土は炭を含む黒褐色粘質土を主体に2層に分層される。出土遺物は8・9世紀代に比定される須器器甕と土師器甕の細片である。

土坑SK10 (図面13)

調査区南西側のH-5区の平坦面に立地する。平面形は楕円形、断面形は皿形である。規模は、長軸58cm、短軸54cm、深さ10cm、長軸方向はN-21°-Wを指す。覆土は炭を含む黒褐色粘質土を主体に2層に分層される。出土遺物は無い。

土坑SK11 (図面13)

調査区南西側のH-5区の平坦面に立地する。平面形は楕円形、断面形は逆台形である。規模は、長軸59cm、短軸41cm、深さ10cm、長軸方向はN-50°-Wを指す。覆土は炭を含む灰褐色砂質土の単層である。出土遺物は無い。

土坑SK12 (図面13)

調査区西側のG-6区の平坦面に立地する。平面形は楕円形、断面形は逆台形である。規模は、長軸129cm、短軸109cm、深さ43cm、長軸方向はN-64°-Eを指す。覆土は炭を含む黒褐色粘質土を主体に3層に分層される。出土遺物は8・9世紀代に比定される須恵器甕と土師器甕の細片である。

土坑SK13 (図面13)

調査区西側のG-6区の平坦面に立地する。平面形は楕円形、断面形は皿形である。規模は、長軸205cm、短軸77cm、深さ26cm、長軸方向はN-24°-Eを指す。覆土は炭を含む灰褐色粘質土を主体に3層に分層される。出土遺物は8・9世紀代に比定される須恵器甕と土師器甕の細片である。

土坑SK15 (図面13)

調査区内側のG-6区の平坦面に立地する。平面形は楕円形、断面形は皿形である。規模は、長軸146cm、短軸103cm、深さ14cm、長軸方向はN-39°-Wを指す。覆土は炭を含む暗褐色粘質土を主体に2層に分層される。出土遺物は8・9世紀代に比定される須恵器甕と土師器甕の細片である。

土坑SK16 (図面13・19、図版11、表3)

調査区西側のG-6区の平坦面に立地する。平面形は楕円形、断面形は皿形である。規模は、長軸84cm、短軸67cm、深さ10cm、長軸方向はN-17°-Wを指す。覆土は灰褐色砂質土で単層である。出土遺物は無い。

土坑SK17 (図面13・19、図版11、表3)

調査区内側のF-5区の平坦面に立地する。平面形は不定形で複数の土坑が重なっていた可能性もある。断面形は皿形である。規模は、長軸168cm、短軸138cm、深さ17cm、長軸方向はN-43°-Wを指す。覆土は炭を含む黒褐色粘質土を主体に2層に分層される。出土遺物は9世紀代に比定される土師器甕・杯が出土し、うち土師器甕(23・24)を掲載した。

土坑SK18 (図面14)

調査区西側のG-6区の平坦面に立地する。平面形は方形、断面形は皿形である。規模は、長軸121cm、短軸89cm、深さ11cm、長軸方向はN-86°-Eを指す。覆土は黒褐色粘質土を主体に2層に分層される。出土遺物は無い。

土坑SK18 (図面14)

調査区西側のE-4、F-4区の平坦面に立地する。平面形は方形、断面形は皿形である。規模は、長軸70cm、短軸69cm、深さ16cm、長軸方向はN-20°-Wを指す。覆土は黒褐色粘質土を主体に3層に分層される。出土遺物は9世紀代に比定される須恵器甕と土師器甕の細片である。

土坑SK20 (図面14)

調査区西側のE-4区の平坦面に立地する。平面形は方形基調、断面形は皿形である。規模は、長軸97cm、短軸73cm、深さ10cm、長軸方向はN-4°-Wを指す。覆土は暗褐色土で単層である。出土遺物は8・9世紀代に比定される土師器甕の細片である。

土坑SK21 (図面14・19、図版11、表3)

調査区内側のF-5区の平坦面に立地する。平面形は円形、断面形は逆台形である。規模は、長軸92cm、短軸

89cm、深さ24cm、長軸方向はN-47°-Eを指す。覆土は黒褐色粘質土である。出土遺物は8~9世紀代に比定される須恵器杯・蓋と土師器甕が出土し、うち須恵器杯(25)を掲載した。

土坑SK22 (図面14・19・25、図版11・15、表3・5)

調査区西側のF-5区の平坦面に立地する。平面形は長方形、断面形は皿形である。規模は、長軸110cm、短軸73cm、深さ8cm、長軸方向はN-85°-Wを指す。覆土は褐灰色砂質土で単層である。出土遺物は8世紀後半に比定される須恵器甕・杯と土師器甕が出土し、うち須恵器杯(26)、土鍾(119)を掲載した。

土坑SK23 (図面14)

調査区南東側のG-11区の平坦面に立地する。平面形は長方形、断面形は逆台形である。規模は、長軸144cm、短軸74cm、深さ26cm、長軸方向はN-33°-Wを指す。覆土は暗褐色土を主体に2層に分層される。出土遺物は8・9世紀代に比定される須恵器甕と土師器甕の細片である。

土坑SK26 (図面14)

調査区東側のE-10区の平坦面に立地する。平面形は不定形、断面形は逆台形である。規模は、長軸126cm、短軸96cm、深さ18cm、長軸方向はN-69°-Eを指す。覆土は灰黒色土で単層である。出土遺物は10~11世紀代に比定される土師器甕・杯である。土師器杯には底部回転糸切り難し無調整や内面黒色処理の技法がみられる。

土坑SK27 (図面14)

調査区南東側のF-8・9区の平坦面に立地する。平面形は楕円形、断面形は皿形である。規模は、長軸122cm、短軸102cm、深さ8cm、長軸方向はN-37°-Wを指す。覆土は灰褐色砂質土で単層である。出土遺物は10世紀代に比定される底部回転糸切り難し無調整の土師器杯が出土した。

土坑SK28 (図面14・19、図版9-1・11、表3)

調査区東側のC-9、D-9区の平坦面に立地する。平面形はやや不定な長方形、断面形は逆台形である。規模は、長軸359cm、短軸110cm、深さ15cm、長軸方向はN-83°-Wを指す。覆土は炭を含む黒褐色粘質土で単層である。出土遺物は8世紀代に比定される須恵器甕と土師器甕が底面着でまとも出土し、うち土師器甕(27・28)を掲載した。

井戸

井戸SE01 (図面14・20、図版8-2・3、11、表3)

調査区南東側のG-10区の緩斜面に立地する。素掘りである。平面形は楕円形、断面形は逆台形である。規模は、長軸210cm、短軸166cm、深さ100cm、長軸方向はN-53°-Eを指す。覆土は炭を含む黒褐色砂質土を主体に9層に分層される。全体的にレンズ状堆積で、井戸側を抜き取ったような痕跡も観察されなかった。出土遺物は土師器甕・杯などが出土し、うち12世紀代に比定される白磁碗(29)と、板材(30-33)を掲載した。

溝

現地調査の時点で38条確認されたが、整理調査段階で土坑に変更し、溝SD01のように近・現代の所産と判断したものは本報告から除外した。最終的な溝の数は30条である。また、溝SD30・37・38も現地調査で出土遺物や掘り込み面などから近・現代の所産と判断したため、全体は掘りあげなかった。溝SD37・38は耕地整理直前まで谷筋に沿って走行していた水路で、昭和21年撮影の航空写真でも看取できる。また、遺跡全体図で調査区を縦断する浅い谷の外端として図化した線は、耕地整理直前の水路溝SD37・38の護岸用に打ち込まれた板材の分布線である。

なお、30条の溝は、すべて調査区を縦断する浅い谷を挟んで東側に偏在し、その大半は建物に付設するものと考えられる。西側は、近・現代の耕作に関連する溝で、遺構として取り扱わなかった。

溝SD02 (図面15・20・25、図版11・15、表3・5)

調査区東側のF-10・11、G-10・11区に位置し、東西方向に湾曲ぎみに走行する。断面形は逆台形、上幅56～98cm、全長8.30m、深さ15～50cmである。覆土は暗灰褐色土を主体とする。土師器杯や土錘が出土した。柱状高台の土師器杯(34)・土錘(109)を掲載した。11世紀から12世紀前半の遺物が主体である。

溝SD03 (図面15)

調査区南東側のF-11・G-10区に位置し、東西方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅36～45cm、全長8.78+ α m、深さ4～12cm、走行方向はN-48°-Wである。覆土は黒褐色土の単層である。土師器甕、須恵器杯が出土した。9世紀代の遺物が主体。位置的に掘立柱建物SB17に付設するものと考えられる。

溝SD04 (図面15、図版10)

調査区東側のF-11・G-11区に位置し、南北方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅48～70cm、全長5.50+ α m、深さ5～6cm、走行方向はN-14°-Wである。覆土は黒褐色土の単層である。出土遺物は僅少ながら9世紀代の須恵器杯が出土した。

溝SD05 (図面15・20、図版11、表3)

調査区南東側のF-11・12区に位置し、東西方向に直線的に走行する。断面形は逆台形、上幅48～74cm、全長6.15m、深さ7～12cm、走行方向はN-46°-Wである。覆土は黒褐色土を主体とする。一部7世紀代の須恵器も混じるが主体は8世紀後半から9世紀前半の遺物である。須恵器杯(35) 高台付杯(36)を掲載した。

溝SD06 (図面15・20、図版12、表3・4)

調査区南東側のG-11区に位置し、東西方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅38～66cm、全長2.95+ α m、深さ7～8cm、走行方向はN-50°-Wである。覆土は黒褐色土の単層である。土師器甕、須恵器杯・甕・木製品が出土した。9世紀代の遺物が主体とする。須恵器杯(37・38)・甕(39・40)、土師器甕(41)、板材(42・43)を掲載した。位置的に掘立柱建物SB17に付設する可能性がある。

溝SD07 (図面15)

調査区南東側のF-11に位置し、南北方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅29～43cm、全長4.30m、深さ4～6cm、走行方向はN-12°-Wである。覆土は黒褐色土を主体とする。僅少ながら土師器甕、須恵器杯が出土した。

溝SD08 (図面15)

調査区南東側のF-9・10に位置し、東西方向に湾曲的に走行する。断面形は皿形、上幅38～73cm、全長9.95m、深さ5～10cm、走行方向はN-13°-Wである。覆土は黒褐色土を主体とする。土師器甕、須恵器杯が出土した。9世紀代の遺物が主体である。

溝SD09 (図面15・21、図版12、表4)

調査区東側のE-9・F-10区に位置し、掘立柱建物SB20の東側を「コ」の字形に走行する。断面形は皿形、上幅30～54cm、全長18.00+ α m、深さ5～15cm、走行方向はN-52°-Eである。覆土は黒褐色土を主体とする。土師器甕、須恵器杯・甕が出土した。9世紀代の遺物が主体である。須恵器双耳瓶(44)を掲載した。位置的に掘立柱建物SB20に付設する可能性がある。

溝SD10 (図面15)

調査区東側のF-9・10区に位置し、東西方向に湾曲的に走行する。断面形は皿形、上幅32～88cm、全長9.54m、

深さ4~12cm、走行方向はN-62°-Eである。覆土は黒褐色土を主体とする。10世紀代に比定される土師器杯、須恵器甕・杯が出土した。

溝SD11 (図面16・21・25、図版12・15、表4・5)

調査区東側のD-9・10区に位置し、東西方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅31~82cm、全長12.95+ α m、深さ4~10cm、走行方向はN-68°-Eである。覆土は黒褐色土を主体とする。10世紀代に比定される土師器杯・甕、須恵器甕・瓶、製塩土器が出土した。他に流れ込みと見られる古墳時代の土師器埴も出土した。須恵器瓶(45)、土師器杯(46)・埴(47)、土錘(113)を掲載した。

溝SD12 (図面15)

調査区南東側のG-10区に位置し、南北方向にやや湾曲的に走行する。断面形は皿形、上幅32~48cm、全長4.02+ α m、深さ4~11cm、走行方向はN-50°-Eである。覆土は黒褐色土を主体とする。10世紀代に比定される土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・瓶が出土した。

溝SD14 (図面15)

調査区北東側のB-9・10区に位置し、東西方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅25~48cm、全長3.82+ α m、深さ4~8cm、走行方向はN-31°-Wである。覆土は黒褐色土を主体とする。10世紀代に比定される回転糸切り難し無調整で内面黒色処理の土師器杯・甕、須恵器杯・甕・瓶が出土した。位置的に掘立柱建物SB03に付設する可能性がある。

溝SD15 (図面15)

調査区北東側のB-9区に位置し、東西方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅18~50cm、全長5.38+ α m、深さ2~10cm、走行方向はN-56°-Eである。覆土は黒褐色粘質土を主体とする。11~12世紀前半に比定される土師器柱状高台杯、須恵器杯・甕が出土した。

溝SD16 (図面16)

調査区北東側のB-9、C-9区に位置し、南北方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅40~70cm、全長11.74+ α m、深さ13~19cm、走行方向はN-19°-Wである。覆土は黒褐色土を主体とする。10世紀代に比定される回転糸切り難し無調整の土師器杯が出土した。

溝SD17 (図面16)

調査区北東側のB-9区に位置し、L字状に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅24~66cm、全長8.60+ α m、深さ8~9cm、走行方向はN-30°-Wである。覆土は黒褐色土を主体とする。9世紀代の遺物が主体である。8・9世紀代に比定される須恵器甕が出土した。

溝SD18 (図面15)

調査区北東側のB-8・9区に位置し、東西方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅14~46cm、全長9.06m、深さ3~10cm、走行方向はN-60°-Eである。覆土は黒褐色土を主体とする。10世紀代に比定される回転糸切り難し無調整の土師器杯と甕が出土した。位置的に掘立柱建物SB03に付設する可能性がある。

溝SD19 (図面15)

調査区北東側のB-9区に位置し、T字状に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅44~68cm、全長(南北0.80+ α m、東西3.92m)、深さ7~15cm、走行方向はN-28°-WとN-64°-Eである。覆土は黒褐色土を主体とする。10世紀代に比定される土師器甕・杯、須恵器杯・瓶が出土した。

溝SD20 (図面16)

調査区北東側のB-9区に位置し、東西方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅26~40cm、全長2.25m、

深さ4~10cm、走行方向はN-65°-Eである。覆土は黒褐色土を主体とする。出土遺物は無い。

溝SD21 (図面16)

調査区北東側のC-8・9区に位置し、東西方向にやや湾曲気味に走行する。断面形は皿形、上幅17~72cm、全長5.98m、深さ4~12cm、走行方向はN-80°-Eである。覆土は黒褐色土を主体とする。10世紀代に比定される土師器壺・杯、須恵器杯が出土した。

溝SD22 (図面16)

調査区北東側のC-8・9区に位置し、南北方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅20~33cm、全長5.36m、深さ4~7cm、走行方向はNo-50°-Wである。覆土は黒褐色土を主体とする。出土遺物は無い。

溝SD23 (図面16)

調査区北東側のC-8・9区に位置し、南北方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅14~28cm、全長6.40m、深さ3~6cm、走行方向はN-34°-Wである。覆土は黒褐色土を主体とする。10世紀代に比定される回転糸切り離し無調整の土師器杯と甕が出土した。

溝SD24 (図面16)

調査区東側のD-9、E-9区に位置し、南北方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅31~49cm、全長5.64m、深さ2~11cm、走行方向はN-34°-Wである。覆土は黒褐色土を主体とする。出土遺物は無い。

溝SD25 (図面16)

調査区東側のD-8・9区に位置し、南北方向にやや湾曲気味に走行する。断面形は皿形、上幅24~58cm、全長4.10m、深さ2~5cm、走行方向はN-28°-Wである。覆土は黒褐色土を主体とする。出土遺物は無い。位置的に掘立柱建物SB11に付設する可能性がある。

溝SD26 (図面16)

調査区東側のD-9・10区に位置し、東西方向に湾曲気味に走行する。断面形は皿形、上幅37~46cm、全長5.17m、深さ5~9cm、走行方向はN-63°-Wである。覆土は黒褐色土を主体とする。出土遺物は無い。

溝SD30 (図面17)

調査区東側のB-8・9、C-6・7区に位置し、やや湾曲気味に走行する。断面形は皿形、上幅408~674cm、全長28.95+ α m、深さ68~106cm、走行方向はN-18°-Eである。覆土は黒褐色粘質土と暗褐色砂質土を主体に11層に分層される。遺跡全体図に添付した縦断面から本溝が複数回掘り返されていることが確認できた。土師器壺・杯、須恵器壺が出土したが、本溝が古代から中世前期の小穴群を壊して掘り込まれていることから、時期的には新しくなると考える。

溝SD31 (図面16)

調査区南東側のE-11、F-11区に位置し、南北方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅44~58cm、全長4.74m、深さ6~9cm、走行方向はN-5°-Wである。覆土は黒褐色土を主体とする。出土遺物は無い。

溝SD32 (図面17)

調査区東側のD-10・11、E-10区に位置し、東西方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅116~190cm、全長13.36+ α m、深さ3~14cm、走行方向はN-57°-Eである。覆土は黒褐色土を主体とする。出土遺物は無い。

溝SD33 (図面17)

調査区南東側のF-11区に位置し、南北方向には直線的に走行する。断面形は皿形、上幅38~58cm、全長4.05m、深さ7~13cm、走行方向はN-20°-Wである。覆土は黒褐色土を主体とする。出土遺物は無い。

溝SD34（図面17）

調査区北東側のC-8区に位置し、東西方向に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅16~34cm、全長2.08m、深さ3~6cm、走行方向はN-52°-Wである。覆土は黒褐色土を主体とする。出土遺物は無い。位置的に掘立柱建物SB05に付設する可能性がある。

溝SD35（図面17）

調査区北東側のB-8・9・10Kに位置し、T字状に直線的に走行する。断面形は皿形、上幅19~76cm、全長（南北5.56+e m、東西14.05m）、深さ2~17cm、走行方向はN-30°-WとN-62°-Eである。覆土は黒褐色土を主体とする。出土遺物は無い。

第3章 遺物

掘立柱建物出土遺物

掘立柱建物SB02（図面18、図版10、表3）

1はロクロ土師器皿で、内厚な底部から直線的に開く。

掘立柱建物SB05（図面18、図版10、表3）

2は土師器甕である。11縁部は僅かに外反して受口状になる。3は木製皿で、柱穴P21掘方内から出土した。

掘立柱建物SB08（図面18、図版10、表3）

4は須恵器杯で、底部を回転糸切り離し後高台が貼り付けられた。5・6はロクロ土師器杯で、いずれも柱穴掘方内から出土した。5は内厚な底部で回転糸切り離し無調整であり、6は回転糸切り離し後高台貼り付けられた。

掘立柱建物SB09（図面18、図版10、表3）

7は内面黒色処理のロクロ土師器杯である。

掘立柱建物SB13（図面18、図版10、表3）

8は手捏ね土器で、柱穴掘方への流入とみられる。9は製塩土器の口辺部で、内外面とも輪痕痕、被熱痕とも明瞭である。

掘立柱建物SB14（図面18、図版10、表3）

10はロクロ土師器杯、11は土師器甕である。12は小型のロクロ土師器甕で11縁部は僅かに外反して受口状になる。

掘立柱建物SB15（図面18、図版10、表3）

13はロクロ土師器杯で回転糸切り離し無調整である。

小穴出土遺物

小穴P78（図面18、図版10、表3）

14は土師器甕で、内外面とも器面の摩耗著しく調整技法不明である。

小穴P114（図面18、図版10、表3）

15は流紋岩製の砥石で両端を欠損し、研面は4面である。

小穴P173 (図面19、図版10、表3)

16は須恵器杯で、底部を回転施切り離し後、高台が貼り付けられた。

小穴P195 (図面19、図版10、表3)

17はロクロ土師器皿である。高台は足長で、皿部は水平気味に開く。

小穴P196 (図面19、図版10、表3)

18は流紋岩製の砥石で、研面は4面である。

小穴P210 (図面19、図版10、表3)

19はロクロ土師器杯で、底部を回転施切り離し後、高台が貼り付けられた。高台部剥離している。

小穴P257 (図面19、図版10、表3)

20はロクロ土師器杯で、底部は回転施切り離し無調整である。

小穴P301 (図面19、図版11、表3)

21は土師器甕で、胴部外面縦位兎削り後、横位の刷毛目調整をしている。内面は粗い刷毛目調整である。

小穴P369 (図面19、図版11、表3)

22は柱状高台のロクロ土師器杯である。底部は回転施切り離し無調整である。

土坑出土遺物

土坑SK17 (図面19、図版11、表3)

23はロクロ成形の土師器甕で、口縁部は僅かに外反して受口状である。24は回転カキ目調整の土師器甕である。

土坑SK21 (図面19、図版11、表3)

25は須恵器杯で、底部は回転施切り離し無調整である。

土坑SK22 (図面19、図版11、表3)

26は須恵器杯で、底部は回転施切り離し無調整である。

土坑SK28 (図面19、図版11、表3)

27・28は土師器甕である。いずれも器向の摩耗著しく、内外面の調整技法は不明である。古墳時代後期のもものとみられる。

井戸出土遺物

井戸SE01 (図面20、図版11、表3)

29は白磁碗である。削り高台で、太宰府分類の白磁碗Ⅱ類に該当するもので、12世紀代の製品とみられる。30～33はいずれも板目の板状木製品である。

溝出土遺物

溝SD02 (図面20、図版11、表3)

34は柱状高台のロクロ土師器杯である。底部は回転施切り離し無調整である。

溝SD05 (図面20、図版11、表3)

35・36は須恵器杯である。いずれも底部は回転施切り離して、36はその後内端接地の高台を貼り付けた。

溝SD06 (図面20、図版12、表3)

37・38は須恵器杯である。いずれも底部は回転鋸切り離し無調整である。39・40は須恵器甕である。39は外面縄目状の叩き、内面同心円状の当て具痕が見られる。40は頸部に波状文が施文されている。41はL1辺部が外傾する土師器甕である。42・43は柘目の板状木製品である。

溝SD09 (図面20、図版12、表3)

41は須恵器双耳瓶である。

溝SD11 (図面20、図版12、表3)

45は須恵器瓶である。46はロクロ土師器杯である。回転鋸切り離した後、足長な高台を貼り付けた。47は土師器埴である。6世紀代のもので流れ込みと考える。

遺物包含層出土遺物

古墳須恵器 (図面21、図版12、表4)

古墳時代のもをまとめた。48は杯身で、丸底から稜をもち、L1辺部は短く内傾して立ち上がる。49・50は甕で、頸部に2段の波状文を施文する。

古墳土師器 (図面21、図版12、表4)

古墳時代のもをまとめた。51は高杯の脚柱部で、裾部が強く屈曲する。52は埴である。53から56は甕である。いずれも6世紀代に帰属するとみられる。

製塩土器 (図面21・22、図版13・15、表4)

57～59である。厚手で、平底の鉢形である。内外面とも明瞭な輪箱み痕と指頭圧痕がみられ、いずれも底部から体部下半にかけて明瞭な二次焼成痕が認められる。今回の調査で約15個体が出土し、掘立柱建物SB08・09付近の調査区東側中央部にやや集中がみられる。大半は、古代のものと思われる。

古代須恵器 (図面22・23、図版13・14、表4)

古代のもをまとめた。60～66は蓋である。端部が短く屈曲するものや擬宝珠状の揃みが多くみられる。67～73は杯である。切り離し技法はいずれも回転鋸切り離しである。67は器高が低く皿状である。杯は口径と底径の差が少ない。70は丸底気味、73は高台貼り付けで底部は出尻気味である。69の底部内面に「|」の刻青あり。74～79は甕で、74は短頸甕である。78・79は瓶で、78は双耳瓶の把手である。80～82は中世須恵器ないし珠州の可能性ある。細片であるため、一応この項目で記述する。80・81は甕である。82は鉢である。

古代土師器 (図面23、図版14、表4・5)

古代のもをまとめた。83～85・87～90は杯、86は皿である。83は口径と底径の差が大きく、体部は内湾する。87・88は足長な高台を貼り付けた。90は内面黒色処理されている。いずれも底部は回転鋸切り離しである。

灰釉陶器 (図面24、図版14、表5)

91は碗である。釉薬は内面と口縁部外面に薄く刷毛塗りされ、やや崩れ気味の角高台を貼り付け、口縁部の反りも小さい。黒笹90号窯式に比定される。

緑釉陶器 (図面24、図版14、表5)

92は碗である。釉薬は濃緑で胎土は緻密で、高台は貼り付けられた。黒笹90号窯式に比定される。

白磁 (図面24、図版14、表5)

93・94は台形の削り出し高台で、体部下端より露胎。施釉は薄く、釉色は灰白色で胎土に黒い細か粒を僅かに含む。太宰府分類の白磁碗Ⅳ類に該当する。95は口縁端部が外反する。白磁碗Ⅳ類に該当するとみられる。

珠洲 (図面24、図版14、表5)

96～98は甕である。いずれも外面に平行叩き目を残し、96は口縁部が短く強く屈曲する。96は珠洲Ⅱ期、97はⅢ期、98はⅢ期かⅣ期に該当するとみられる。99は播鉢で、直線的な卸目が縁に施入する。底部は静止糸切り無し無調整である。珠洲Ⅲ期に該当するとみられる。

銭貨 (図面24、図版14、表5)

100は銅銭である。判読は判然としない。「元通通宝」か。

石製品 (図面24、図版14、表5)

101・102は砥石である。流紋岩製で、3側面が研ぎ面となる。

土製品 (図面25、図版15、表5)

103～124は漁網錘とみられる土錘である。今回の調査で38個体が出土し、形態からA～Cの3種に分類した。A種は長さが短くずんぐりした樽形で、全量の約5%である。103・104が該当する。他種に分類した土錘外面に際立った調整痕が認められなかったが、A種のは全面にわたって地削り調整を行っている。いずれも掘立柱建物SB20の柱穴底部に果石として再利用されていた。B種はA種より長い紡錘形で、全量の約70%である。105～118が該当する。小口両端を面取りする程度で、際立った調整痕がみられない。C種は長さが最も長く、管状に近い形で、全量の約25%である。119～124が該当する。

第4章 自然科学分析

1. 放射性炭素年代測定

岩坪岡田島遺跡（グラスキューブ地区）の本発掘調査時に検出された遺物2点を用い、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を実施した。以下にその概要を述べる。

試料

試料は柱材2点である。試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、グラファイトに調整した後、加速器質量分析計（AMS）にて測定した。測定された¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行い、補正した¹⁴C濃度を用いて¹⁴C年代を算出した。

分析結果

表1に、試料の同位体分別効果の補正值、同位体分別効果による測定誤差を補正した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代を示す。¹⁴C年代値(yrBP)の算出は、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差(±1σ)は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。これは、試料の¹⁴C年代が、その¹⁴C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。表2には参考として確率95%も掲載しておく。

1) BP年代値は、1950年からさかのぼること何年前かを表す。

2) 付記した誤差は、標準偏差(1σ)に相当する年代で、次のように算出する。

複数回(通常は4回)の測定値についてχ²検定を行い、測定値のばらつきが小さい場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、ばらつきが大きい場合には不偏分散の平方根(標準偏差)と統計誤差から求めた値を比較して大きい方を誤差とする。

3) δ¹⁴Cの値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定されるδ¹⁴Cの値を用いることもある。

δ¹⁴C補正をしない場合の同位体比および年代値も参考として掲載しておく。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰;パーミル)で表したものである。

$$\delta^{14}\text{C} = \left[\frac{({}^{14}\text{A}_s - {}^{14}\text{A}_n)}{{}^{14}\text{A}_n} \right] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{14}\text{C} = \left[\frac{({}^{14}\text{A}_s - {}^{14}\text{A}_{\text{ref}})}{{}^{14}\text{A}_{\text{ref}}} \right] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、¹⁴A_s: 試料炭素の¹⁴C濃度: (¹⁴C/P)_sまたは(¹⁴C/C)_s

¹⁴A_n: 標準現代炭素の¹⁴C濃度: (¹⁴C/P)_nまたは(¹⁴C/C)_n

δ¹⁴Cは、質量分析計を用いて試料炭素の¹⁴C濃度(¹⁴A_s = ¹⁴C/P)を測定し、PDB(白亜紀のベレムナイト(矢石)類の化石)の値を基準として、それからのずれを計算する。

ただし、加速器により測定中に同時に¹⁴C/Pも測定しているの、標準試料の測定値との比較から算出したδ¹⁴Cを用いることもある。この場合には表中に[加速器]と注記している。

また、Δ¹⁴Cは、試料炭素がδ¹⁴C = -25.0(‰)であるとしたときの¹⁴C濃度(¹⁴A_s)に換算した上で計算した値である。(1)式の¹⁴C濃度を、δ¹⁴Cの測定値をもとに次式のように換算する。

$${}^{14}\text{A}_s = {}^{14}\text{A}_0 \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C}/1000))^2 \quad ({}^{14}\text{A}_0 \text{として} {}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= {}^{14}\text{A}_s \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C}/1000)) \quad ({}^{14}\text{A}_s \text{として} {}^{12}\text{C}/{}^{13}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{A}_s - {}^{13}\text{A}_0) / {}^{13}\text{A}_0] \times 1000 \quad (\%)$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行なった年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない ${}^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的良好でその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

${}^{13}\text{C}$ 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{13}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{13}\text{C} = (\text{pMC}/100 - 1) \times 1000 \quad (\%)$$

$$\text{pMC} = \Delta^{13}\text{C}/10 + 100 \quad (\%)$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{13}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age ; yrBP) が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{13}\text{C}/1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC}/100)$$

暦年代校正

暦年代校正とは、大気中の ${}^{14}\text{C}$ 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された14C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ${}^{14}\text{C}$ 濃度の変動、及び半減期の違い (${}^{14}\text{C}$ の半減期5,730 \pm 40年) を校正し、より正確な年代を求めるために、 ${}^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に変換することである。

具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚のU-Th年代と ${}^{14}\text{C}$ 年代の比較、および海成堆積物中の腐状の堆積構造を用いて ${}^{14}\text{C}$ 年代と暦年代の関係を調べたデータにより、校正曲線を作成し、これを用いて ${}^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に校正した年代を算出する。

${}^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に校正した年代の算出にCALIB 4.3 (CALIB 3.0のバージョンアップ版) を使用した。ただし、暦年代校正値は ${}^{14}\text{C}$ 年代値に対応する校正曲線上の暦年代値であり、1 σ 暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された ${}^{14}\text{C}$ 年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその1 σ 暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。1 σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示した。

表1. 放射性炭素年代測定の結果

No.	試料	B P年代及び炭素の同位体比
1	試料採取場所 : 岩坪岡山島遺跡	Libby Age (yrBP) : 1,140 ± 30
		$\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器) = -30.81 ± 0.69
	試料形態 : 柱材	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -132.1 ± 3.6
	試料名(番号) : S B08-P10	pMC (%) = 86.79 ± 0.36
(参考)	$\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) = -142.4 ± 3.3
		pMC (%) = 85.76 ± 0.33
		Age (yrBP) : 1,230 ± 30
2	試料採取場所 : 岩坪岡山島遺跡	Libby Age (yrBP) : 900 ± 30
		$\delta^{13}\text{C}$ (‰), (加速器) = -28.28 ± 0.66
	試料形態 : 柱材	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -106.2 ± 3.6
	試料名(番号) : S B06-P7	pMC (%) = 89.38 ± 0.36
		$\delta^{14}\text{C}$ (‰) = -112.2 ± 3.4
	(参考)	$\delta^{13}\text{C}$ の補正無し
		Age (yrBP) : 960 ± 30

表2. ^{14}C 年代を暦年代に校正した年代(範囲)結果

試料名	1σ 暦年代範囲 (左 68%・右 95%)	
1	885AD—905AD (15.2%)	<u>80AD—990AD (95.4%)</u>
	<u>910AD—980AD (53.0%)</u>	
2	1110AD—1140AD (14.4%)	<u>1030AD—1220AD (95.4%)</u>
	1150AD—1190AD (20.1%)	
	<u>1040AD—1100AD (33.8%)</u>	

2. 出土木製品の樹種調査

試料及び観察方法

試料は高岡市岩坪岡田烏遺跡から出土した用途不明品6点である。観察方法としては、剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

分析結果

樹種同定結果（針葉樹1種、広葉樹1種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don)

板材（図面20・30・31・32・33・43）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

2) ニレ科ケヤキ属ケヤキ (*Zelkova serrata* Makino)

皿（図面18・3）

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管（ $\sim 270\mu\text{m}$ ）が1列で孔間部を形成している。孔間外では急に大きさを減じ、多角形の小道管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集団管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔間部では道管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している（イニシアル柔組織）。放射組織は1～3列で多数の筋として見られる。柾目では大道管は単穿孔と髄壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋壁厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組織は少数の1～3列のものと大部分を占める6～7細胞列のほぼ大きさの様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下端の細胞は、他の部分に比べ大型である。ケヤキは本州・四国・九州に分布する。

◆使用顕微鏡◆ Nikon MICROFLEX UFX-DX Type 115

【参考文献】

- 島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）
北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）
伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所（1999）
島地 謙・伊東隆夫「四説木材組織」地球社（1982） 深澤和三「樹体の解剖」海音社（1997）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）



柁目 ×100

板材 (図面20-30) スギ科スギ属スギ



板目 ×40



柁目 ×100

板材 (図面20-32) スギ科スギ属スギ



板目 ×40



柁目 ×100

板材 (図面20-33) スギ科スギ属スギ



板目 ×40

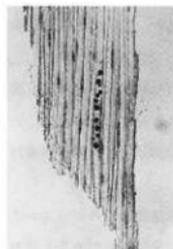


木口 ×40

板材 (図面20-31) スギ科スギ属スギ



柁目 ×100



板目 ×40



木口 ×40

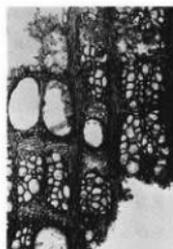


柁目 ×100

板材 (図面20-43) スギ科スギ属スギ



板目 ×40



木口 ×40

皿 (図面18-3) ニレ科ケヤキ属ケヤキ



柁目 ×100



板目 ×40

第5章 結 語

岩坪岡田鳥遺跡（グラスキューブ地区）における調査成果の概要を述べてきた。本章ではこれらを総括し、当該地区及び岩坪岡田鳥遺跡の歴史的様相について考察を加えていきたい。

当該地区では、掘立柱建物が推定20棟のほか、井戸1基、小穴300余基などの遺構が検出されている。これらの推移については資料が稀少であることから不明と言わざるをえないが、周辺から出土した遺物の年代幅により、古墳時代後期・古代・中世前半の計3時期に大別される可能性が高いと思われる。試論の域をでないが、建物の年代については、掘方の出土遺物を勘案するに、掘立柱建物SB19は古墳時代後期、掘立柱建物SB01・08・09など12棟は古代、掘立柱建物SB03・06など6棟は中世前半に帰属すると思われる。上記のうち古代に比定した建物群については、現状では「コ字型」や「品字型」の建物配置を呈していない。また、「院」を構成する部分が検出されていないほか、方位も斉一性がみられない。さらに、規模についても官衙的な遺跡にみられる中軸施設とおぼしき比較的大規模なものも今のところ見受けられない。加えて、その配列などからも倉庫群とする位置づけも類例的に検討を要する状況にあると思われる。

ちなみに、当該期の遺物のなかには計15個体の製埴土器のほか、緑釉陶器や灰釉陶器が数点含まれる。また、試掘調査時には帯金具なども検出されており〔高岡市教委2005〕、概して官衙的な色彩をおびていると言える。しかし、近年では在地家族層の拠点とおぼしき遺跡などからも上記の検出例があるほか、そのような様相をもつ遺跡からの流入物であった可能性も考えられる。また、上記の帯金具についても、表金具と裏金具とが接合したままの状態であったことから、明らかな譲渡品であったと考えられるため、本遺跡についてはこれを譲渡されるような人物が常駐する施設であった可能性が高い。

一方の中世に比定した建物群については、古代のそれに比べ大規模となる建物があるほか、方位などにも規格式が窺える。しかしながら、中世においては類例的に大規模な建物とは言いがたい。また、古代のそれと同様に、当該期の遺物のなかには必ずしも官衙的なものなどが含まれない傾向にある。さらに、同じ岩坪岡田鳥遺跡における他地区の発掘調査成果や、周辺地域に点在する手洗野赤瀧遺跡や門尺遺跡などのそれと対比するならば、一様に同時期の様相が所在しているため〔財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財事務所2000他〕、今回の調査区から検出された遺構群は必ずしも特異なものとは思われない。

私見ではあるが、上記を鑑みるならば、複数遺跡を包括する空間内にそのような中世の様相がひろがっていたものとするべきではないかと思われる。そしてそれを占代から連続と継続される様相の発展形式であると理解しようにも、両様相の時間的断絶など、様々な検討が必要な現状にあると考える。

なお、当該遺跡の南方では、弥永貞三氏らの研究により東大寺須領加莊が比定されている〔弥永1958〕。須加莊の所在をめぐっては、上記以外にも高岡市佐加野周辺とする和田一郎氏の説〔和田1959〕や、同市五十里とする木倉豊信氏や金田幸裕氏の比定案がある〔木倉1936他・金田1998他〕。現状においては、上記3大別の比定案のうちで最有力と評されているのは金田幸裕氏の説である。そして、高岡市教育委員会による平成11年の須田藤の木遺跡でも金田説への肯定的材料を抽出しているほか〔高岡市教委2000〕、これを基礎とした考古学的見解も提起されている〔根津2004〕。

しかしながら、上記の論争はまだ決定的な決着にはいたっていないため、今後の研究の進展を待つところも大きいと思われる。今回の調査についても、須加莊の所在を決定づける成果までは得られなかったが、同荘の活動時期と重複する歴史的様相を抽出したことは大きな成果と考える。また、施釉陶器や帯金具などの出土なども、今後の研究に一石を投ずる資料になるものと思われる。一方の中世においても、さらに広域にわたり様相が所在していたことが確認されたことは当該期への今後の研究に大きな課題を提起したものとする次第である。

【引用・参考文献】

- 木倉豊信 1936「東大寺壘田地を主としたる呉西地区の古代地理（上）」『富山教育』280
- 木倉豊信 1937「東大寺壘田地を主としたる呉西地区の古代地理（中）」『富山教育』287
- 赤木貞三・亀田隆之・新井喜久夫 1958「越中国東大寺領荘園絵図について」『続日本紀研究』5巻2号
(通巻50号) 別冊大坂歴史学会古代史部会内続日本紀研究会
- 和出一郎編 1959『高岡市史』上巻 青林書院新社
- 吉岡康徳 1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 金田章裕 1998『古代荘園図と景観』東京大学出版会
- 金田章裕 1999『古地図から見た古代日本』中公新書
- 横田賢次郎・森田勉 1978「太宰府出土の輸入陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館普及会
- 越前慎子 1996「梅原胡麻堂遺跡出土:中世土師器の編年」『梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告書(遺物編)』
財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 宮田進一 1997「越中国における土師器の編年」『中・近世の北陸—考古学が語る社会史—』桂書房
- 板津明義 2004「越中国西部地域における東大寺領諸荘の所在について—考古学的成果を中心として—」
『日本荘園絵図景観図編』古代ワークショップ資料 東京大学史料編纂所
- 高岡市教育委員会 2004『市内遺跡調査概報XIV』—平成15年度、石塚遺跡の調査他—
高岡市埋蔵文化財調査概報第56冊
- 高岡市教育委員会 2000『須田藤の木遺跡調査報告書』
- 高岡市教育委員会 2004『関尽遺跡調査報告書』高岡市埋蔵文化財調査報告第11冊
- 高岡市教育委員会 2005『市内遺跡調査概報XV』—平成16年度、個人住宅等の建設にともなう発掘調査—
高岡市埋蔵文化財調査概報第62冊
- 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2000『埋蔵文化財調査概要』—平成11年度—
- 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2001『埋蔵文化財調査概要』—平成12年度—
- 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 2002『埋蔵文化財調査概要』—平成13年度—

表3 岩坪岡田島遺跡遺物観察表(1)

図版番号	遺物番号	器形	法量 (cm)			胎土 ①焼成 ③色調 ④遺存度	特徴
			口径	器高	底径		
1	SB02 P24	皿	(13.0)	2.1	(5.4)	①a②礫化③浅黄褐色④口辺部 1/6	内面下部から直線的に体部立上る。
2	SB05 P26 (P111)	壺	(36.0)	-	-	①a、c②礫化③浅黄褐色④口辺部小片	1) 頸部つまみ上げ。
3	SB05 P21 (P355)	皿(木製品)	-	-	(8.4)	②底部	縁・下地は調整。ニシ界ややも緩々す。
4	SB08 P5 (P230)	杯	(12.4)	4.8	(7.8)	①a、f②還元③灰白色④1/3	底部前後切り離し状。高台貼り付け。
5	SB08 P9 (P271)	杯	(10.5)	3.4	(3.6)	①c②礫化③灰白色④1/2	底部回転未切り無調整。
6	SB08 P4 (P174)	杯	-	-	7.4	①c②礫化③灰白色④1/3	回転系切り離し後、高台貼り付。
7	SB09 P9 (P270)	杯	-	-	7.0	①c、c②礫化③浅黄褐色④底部 1/2	内面黒色処理。
8	SB13 P6 (P179)	手捏ね土器	(6.6)	3.3	(5.8)	①a、c②礫化③灰白色④1/4	器面の磨耗あり。古墳時代のものか。
9	SB13 P3 (P192)	鉢(鍵塩土器)	(29.7)	(29.7)	-	①c②礫化③灰白色④口辺部小片	内外面ともに明瞭な磨損痕と被熱痕を残す。体部は直線的に立上る。
10	SB14 P10 (P275)	杯	-	-	7.2	①c、a②礫化③灰白色④1/2	回転系切り離し後、やや足長の高台貼り付。
11	SB14 P11 (P131)	壺	(16.2)	-	-	①c②礫化③浅黄褐色④口辺部 1/6	1) 頸部を要し口縁につまみ上げ。
12	SB14 P10 (P275)	壺	(21.4)	-	-	①c、a②礫化③浅黄褐色④口辺部小片	口縁部つまみ上げ。
13	SB15 P6 (P370)	杯	12.2	4.2	4.0	①a②礫化③浅黄褐色④3/5	底部前後切り無調整。
14	P78	壺	(25.2)	-	-	①a、c②礫化③灰白色④口辺部小片	内面より器面の磨耗著しく、調整技法不明。
15	P114	砥石	長さ7.9	幅4.8	厚さ3.0	石材 板状岩	両面欠損。4箇面が砥面。長さ155.2g
16	P173	杯	(14.6)	3.6	(9.7)	①a、f②還元③灰白色④1/4	内面黒色処理。
17	P195	皿	(11.4)	3.1	6.4	①c②礫化③浅黄褐色④2/3	足長高台。
18	P196	砥石	長さ13.7	幅3.7	厚さ4.2	石材 板状岩	4箇面が砥面。長さ207.61g
19	P210	杯	14.8	4.0	6.0	①c、c②礫化③灰白色④3/4	回転系切り離し後、高台貼り付け。高台部割離。
20	P257	杯	(12.7)	4.1	5.0	①c、f②礫化③黄褐色④1/4	底部回転系切り無調整。
21	P301	壺	(27.4)	-	-	①a、b、c、c②礫化③浅黄褐色④口辺部 1/4	頸部外面磨損痕有り後、横位の網目調整。内面幅広い刷毛目。
22	P369	杯	9.0	4.3	4.1	①c、e②礫化③灰白色④1/3	状況高台。
23	SK17	壺	(12.9)	-	-	①a②礫化③浅黄褐色④1/8	コケロ痕跡の小形壺。
24	SK17	壺	(21.8)	-	-	①a②礫化③灰白色④1/8	回転系切り調整。
25	SK21	杯	(12.8)	4.0	(9.4)	①a②還元③灰白色④1/3	底部前後切り離し。
26	SK22	杯	(13.0)	3.9	(8.2)	①a②還元③灰白色④2/5	やや内面平底。
27	SK28	壺	(13.4)	-	-	①a、d、c②礫化③黄褐色④1/10	器面の磨耗著しく、調整技法不明。
28	SK28	壺	(18.0)	-	-	①a、d、c②礫化③黄褐色④1/10	内外面とも器面の磨耗著しく、調整技法不明。
29	SB01	胸	-	-	(5.6)	①磨損②還元③灰白色④体・底部 1/2	①磨損調整。底部にわずかに高台状を併用し。胎土は体部下面までで胎土は透明感のある灰白色。
30	SB01	木製品	長さ17.4	幅2.9	厚さ0.4		板状製品。板目。スギ材スギ材スギ
31	SB01	木製品	長さ18.1	幅2.2	厚さ0.7		板状製品。板目。スギ材スギ材スギ
32	SB01	木製品	長さ23.8	幅3.3	厚さ0.4		板状製品。板目。スギ材スギ材スギ
33	SB01	木製品	長さ24.5	幅2.7	厚さ0.5		板状製品。板目。スギ材スギ材スギ
34	SD02	杯	-	-	5.2	①a②還元③灰白色④体・底部	柱状高台、回転系切り離し無調整。
35	SD05	杯	(13.4)	2.8	(9.8)	①a②還元③灰白色④1/4	底部前後切り離し無調整。
36	SD05	杯	-	-	(12.4)	①c②還元③灰白色④1/4	高台内臓後地。底部で出戻り味。
37	SD06	杯	-	-	(9.6)	①a②還元③灰白色④1/3	底部前後切り離し無調整。
38	SD06	杯	(10.9)	3.0	(7.4)	①a②還元③灰白色④1/10	底部前後切り離し。
39	SD06	壺	(27.4)	-	-	①a②還元④明オリブ灰色⑤口辺部 1/6	頸部外面磨損痕有り後、内面は同心円状の刷毛目。
40	SD06	壺	(37.2)	-	-	①a、c②還元③灰白色④口辺部小片	頸部に被熱痕。
41	SD06	壺	(26.4)	-	-	①c②礫化③浅黄褐色④口辺部小片	1) 口縁天3つ外縁。
42	SD06	木製品	長さ7.9	幅7.0	厚さ2.0		砥石。

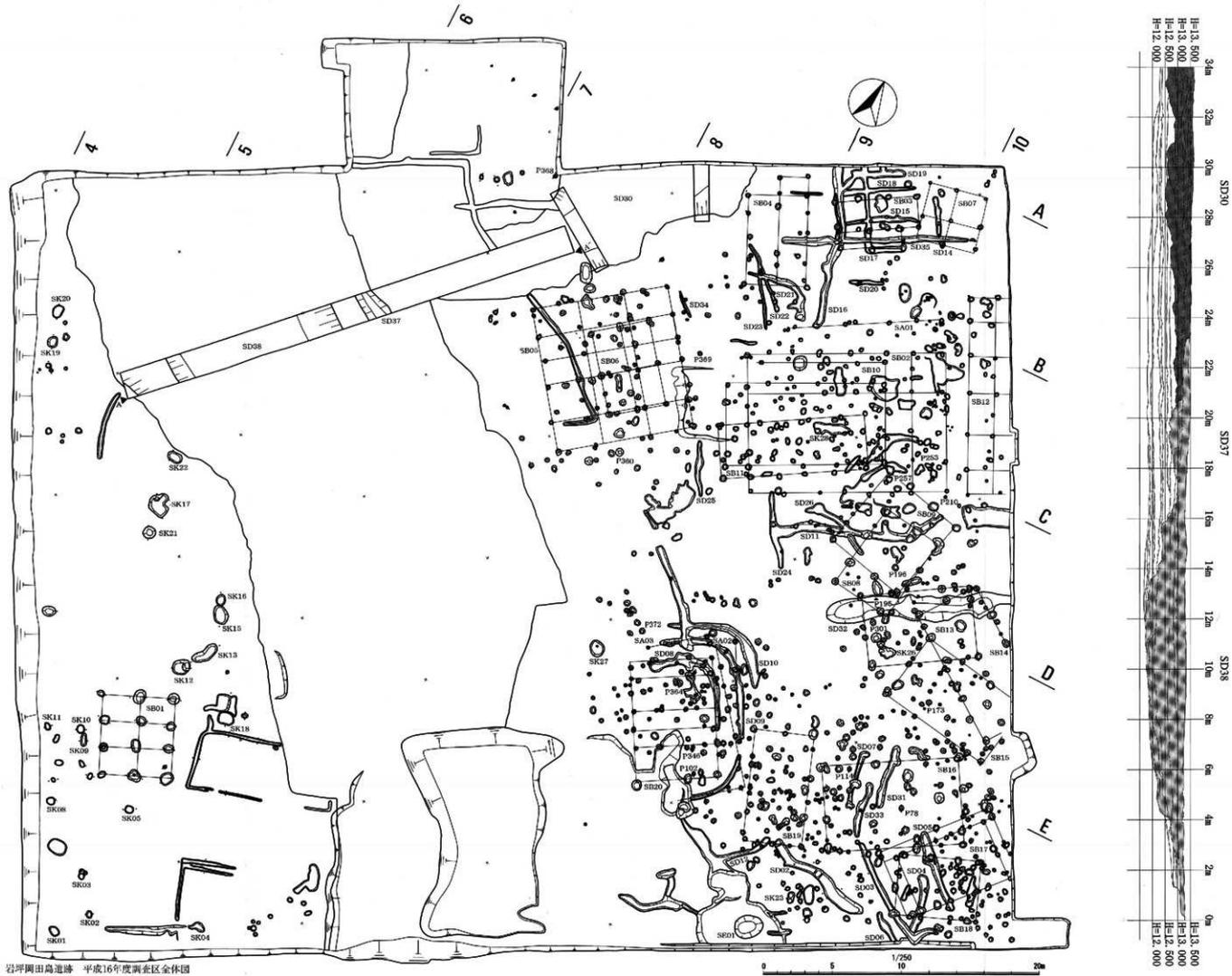
表4 岩坪岡田島遺跡遺物観察表(2)

図号番号	遺物番号	形状	法量 (cm)			①胎土 ②地成 ③色調 ④遺存度	特徴
			1径	幅高	底径		
43	SI06	木製品	長さ27.3	幅3.9	厚さ1.3		板状製品。長目。 ス平幹ス平蓋ス平
44	SD09	奴耳瓶	-	-	-	①胎土②灰白色③1/8	
45	SD11	瓶	-	-	-	①胎土②灰白色③1/8	
46	SD11	杯	-	-	(8.4)	①胎土②灰白色③底部4/5	胎土系切離し後、足長高台高 付付。
47	SD11	埴	8.5	(10.5)	-	①胎土②灰白色③底面④1/8	内面輪郭不明瞭。
48	G-11	杯身	(12.0)	-	-	①胎土②灰白色③1/8	④口辺部④内側。
49	H-6	壺	(30.0)	-	-	①胎土②灰白色③口辺部小片	胎土に二段の波状文施文。6世 紀。
50	E-4	壺	-	-	-	①胎土②灰白色③1/8	胎土に二段の波状文施文。6世 紀後半。
51	D-10	高杯	-	-	-	①胎土②灰白色③2/3	外面輪郭著しく調整不明。脚 部やや膨らみ、絶て強く屈折。
52	D-11	埴	-	-	-	①胎土②灰白色③4/5	外面輪郭著しく、調整不明。 内面輪郭不明瞭。
53	D-11	壺	(13.2)	-	-	①胎土②灰白色③1/8	1/8部外が反る。
54	F-11	壺	(13.6)	-	-	①胎土②灰白色③1/8	胎土系切離し後、口縁部1/8 調整。
55	表球	壺	(18.6)	-	-	①胎土②灰白色③口辺部1/6	内外面とも研毛目調整。内面がや や粗い研毛目。
56	遺構外	壺	(17.2)	-	-	①胎土②灰白色③口辺部 1/4	口の手に外反する口辺部。
57	C-10	鉢(製塩土器)	(31.7)	-	-	①胎土②灰白色③1/8	外面に明確な輪郭。口唇部ま で直線的に立上る。
58	D-10・D-11	鉢(製塩土器)	-	-	(17.0)	①胎土②灰白色③底面1/12	内外とも明確な輪郭。胎土 系切離し後、口唇部から胎土系 に立上る。
59	F-9	鉢(製塩土器)	-	-	(11.6)	①胎土②灰白色③底面1/10	内外面とも明確な輪郭。胎土 系切離し後、口唇部から胎土系 に立上る。
60	E-7	壺	(16.0)	-	-	①胎土②灰白色③1/3	胎土系切離し後、口唇部1/3 調整。
61	F-11	蓋	(16.0)	-	-	①胎土②灰白色③1/5	胎土系切離し後、口唇部1/5 調整。
62	D-10	蓋	-	-	つまみ径2.6	①胎土②灰白色③1/8	胎土系切離し後、口唇部1/8 調整。
63	F-11	壺	(13.4)	-	-	①胎土②灰白色③1/3	胎土系切離し後、口唇部1/3 調整。
64	C-10	壺	(15.2)	-	つまみ径2.8	①胎土②灰白色③1/4	胎土系切離し後、口唇部1/4 調整。
65	E-4	壺	-	-	つまみ径3.1	①胎土②灰白色③1/3	胎土系切離し後、口唇部1/3 調整。
66	表土	壺	19.2	2.4	つまみ径2.5	①胎土②灰白色③1/3	胎土系切離し後、口唇部1/3 調整。
67	G-12	杯	8	2	10.0	①胎土②灰白色③1/3	胎土系切離し後、口唇部1/3 調整。
68	D-10	杯	13.6	3.0	9.8	①胎土②灰白色③1/2	胎土系切離し後、口唇部1/2 調整。
69	F-10	杯	-	-	(10.0)	①胎土②灰白色③底面1/4	胎土系切離し後、口唇部1/4 調整。
70	D-10	杯	(12.8)	4.0	-	①胎土②灰白色③底面	胎土系切離し後、口唇部1/4 調整。
71	F-12	杯	(11.5)	3.4	(8.0)	①胎土②灰白色③1/8	胎土系切離し後、口唇部1/8 調整。
72	D-10	杯	(13.3)	3.7	(9.0)	①胎土②灰白色③1/3	胎土系切離し後、口唇部1/3 調整。
73	F-11	杯	(11.6)	3.8	(8.2)	①胎土②灰白色③1/5	胎土系切離し後、口唇部1/5 調整。
74	D-10	壺	(8.4)	-	-	①胎土②灰白色③口辺部1/4	胎土系切離し後、口唇部1/4 調整。
75	D-9	壺	(16.4)	-	-	①胎土②灰白色③1/4	胎土系切離し後、口唇部1/4 調整。
76	B-9	壺	-	-	(13.2)	①胎土②灰白色③1/8	胎土系切離し後、口唇部1/8 調整。
77	D-6・F-6	壺	-	-	(12.2)	①胎土②灰白色③1/6	胎土系切離し後、口唇部1/6 調整。
78	G-11	奴耳瓶	-	-	-	①胎土②灰白色③底面小片	胎土系切離し後、口唇部1/6 調整。
79	C-10	壺	(12.4)	-	-	①胎土②灰白色③口辺部1/6	胎土系切離し後、口唇部1/6 調整。
80	B-9	壺	(22.8)	-	-	①胎土②灰白色③1/8	胎土系切離し後、口唇部1/8 調整。
81	D-11	壺	(22.8)	-	-	①胎土②灰白色③口辺部小片	胎土系切離し後、口唇部1/8 調整。
82	C-7	鉢	(33.2)	-	-	①胎土②灰白色③口辺部小片	胎土系切離し後、口唇部1/8 調整。
83	F-11	杯	9.8	2.8	4.1	①胎土②灰白色③1/2	胎土系切離し後、口唇部1/2 調整。
84	遺構外	杯	-	-	5.9	①胎土②灰白色③2/3	内外面とも表面の磨毛あり。底 部外面は磨毛止り。
85	C-7	杯	(11.6)	2.9	(6.4)	①胎土②灰白色③1/3	胎土系切離し後、口唇部1/3 調整。
86	D-11	壺	(11.4)	1.8	5.2	①胎土②灰白色③2/3	胎土系切離し後、口唇部2/3 調整。
87	遺構外	杯	-	-	(8.4)	①胎土②灰白色③底面3/4	胎土系切離し後、口唇部3/4 調整。
88	G-11	杯	-	-	(8.0)	①胎土②灰白色③底面1/2	胎土系切離し後、口唇部1/2 調整。

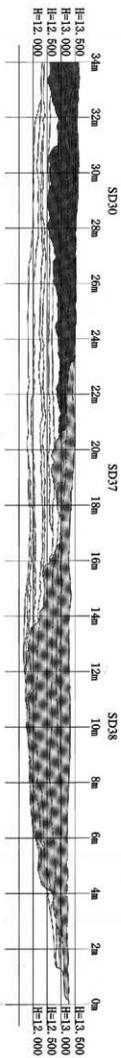
表5 岩坪岡田島遺跡遺物観察表(3)

図版番号	遺物番号	形状	法量 (cm)			①胎上 ②胎底 ③色調 ④遺存状況	特徴
			口径	器高	底径		
89	E-11	杯	-	-	(6.2)	①h、d②酸化③褐色④1/2	底部面が切り離し後、高台部断片付。内面黒色処理。
90	G-11	杯	-	-	(8.0)	①a、c②酸化③黄褐色④底部	
91	F-9	碗	12.6	4.1	6.6	①胎底②胎元③灰白色④胎身⑤胎口部	胎縁部割。器高90号同類。胎縁は内面と外面に縁部は薄く刷毛塗り。ややぬれ気味の角高台断片付。口縁部の反りは小さい。
92	F-12	碗	-	-	(6.0)	①胎底②胎元③オリーブ灰色④1/10	縁部割。胎付け高台。胎縁部で胎上は胎底。器高90号室用の所産とみられる。9世紀後半。
93	遺物外	碗	-	-	(6.6)	①胎底②胎元③灰白色④底部1/5	白磁焼成。台形の器出し高台。体部下端胎縁部は灰白色。胎土に黒い網紋。
94	F-9	碗	-	-	(6.7)	①胎底②胎元③灰白色④底部1/8	白磁焼成。台形の器出し高台。体部下端より胎縁。胎縁は薄く。物色は灰白色。
95	H-6	碗	(13.0)	-	-	①胎底②胎元③灰白色④胎身⑤胎口部断片	白磁焼成。口縁部外反。胎縁部外反。胎縁は灰白色。胎土に黒い網紋。
96	B-9	壺	(38.8)	-	-	①h ②胎元③胎口④胎口部断片	珠洲直製。外壁平明。胎縁直製。胎口部明。
97	表1	壺	(42.0)	-	-	①a②胎元③灰白色④胎口部断片	珠洲直製。胎口部明。
98	E-10	壺	(52.0)	-	-	①h②胎元③灰白色④胎口部断片	珠洲直製④胎口部。外壁平明。
99	F-11	標鉢	-	-	(12.8)	①a②胎元③灰白色④底部1/6	珠洲直製。胎口部直製で胎元は縁。1単位は7日。底部停止糸切り痕。
100	B-8	古銭	径2.4	-	孔径0.6		元禄通寶か。重さ3.17g
101	表土	砥石	長さ4.2	幅3.9	厚2.0		河内瓦。3個面直製。重さ32.15g
102	表土	砥石	長さ6.5	幅4.7	厚2.8		河内瓦。3個面直製。長さ112.92g
103	P346	土鉢	長さ4.5	幅5.8	孔径1.4	Dc、a②酸化③褐色④1/4/5	全周胎縁部直製。*胎底部に胎元として再利用したもの。
104	SB30-P7 (P358)	土鉢	長さ5.2	幅5.1	孔径1.2	Dc、a、c②酸化③褐色④1/2	全周胎縁部直製。*中世建物SB20の柱穴底部に聚石として再利用したもの。重さ63.30g
105	SD11	土鉢	長さ7.1	幅6.0	孔径1.5-1.7	Dc、a②酸化③褐色④胎口部	*中世建物SB02に胎元とみられる器SD11から出土。重さ81.72g
106	SB10-P10 (P272)	土鉢	長さ5.9	幅4.6	孔径1.5-1.7	Dc、a②酸化③褐色④胎口部	表面に指痕。小口両端を面取り。*中世建物SB10の柱穴底部に聚石として再利用したもの。重さ91.53g
107	SB10-P10 (P272)	土鉢	長さ5.5	幅4.7	孔径1.5-1.6	Dc、a②酸化③褐色④胎口部	小口両端を面取り。*中世建物SB10の柱穴底部に聚石として再利用したもの。重さ84.18g
108	P253	土鉢	長さ5.1	幅4.3	孔径1.6	Dc、a②酸化③褐色④胎口部	採取工具への粘土器打痕が表面に残る。*柱穴底部に聚石として再利用したもの。重さ70.63g
109	SD02	土鉢	長さ5.3	幅4.5	孔径1.8	Dc、a②酸化③褐色④胎口部	小口両端を面取り。重さ83.13g
110	D-9	土鉢	長さ6.1	幅4.5	孔径1.6-1.7	Dc②酸化③赤褐色④胎口部	重さ90.70g
111	F-9	土鉢	長さ5.4	幅4.1	孔径1.1	Dc、a、b②酸化③赤褐色④胎口部	重さ76.31g
112	C-9	土鉢	長さ6.7	幅4.4	孔径1.9-2.1	Dc、a②酸化③褐色④胎口部	小口両端を面取り。長さ89.54g
113	SD11	土鉢	長さ4.1	幅2.9	孔径1.0	①胎底②胎元③褐色④1/4	*中世建物SB02に胎元とみられる器SD11から出土。重さ25.08g
114	D-9	土鉢	長さ4.1	幅1.0	孔径1.7	Dc、a②酸化③赤褐色④胎口部	粘土板を胎縁に巻付けて形成。重さ43.35g
115	E-7	土鉢	長さ4.3	幅3.7	孔径1.3	①胎底②胎元③赤褐色④胎口部	重さ41.01g
116	D-9	土鉢	長さ3.9	幅3.7	孔径1.3	Dc、a②酸化③褐色④胎口部	長さ30.13g
117	D-10	土鉢	長さ4.0	幅3.8	孔径1.4-1.5	①胎底②胎元③褐色④胎口部	重さ36.83g
118	D-10	土鉢	長さ3.3	幅2.3	孔径1.2	Dc②酸化③褐色④1/3	重さ13.13g
119	SK22	土鉢	長さ8.3	幅3.8	孔径1.3-1.5	Dc、a②酸化③褐色④胎口部	長さ103.86g
120	D10	土鉢	長さ7.5	幅3.7	孔径1.3-1.6	Dc、c、a②酸化③赤褐色④胎口部	粘土板を胎縁に巻付けて形成し、器縁及び小口両端の調整痕はない。長さ77.91g
121	表土	土鉢	長さ7.3	幅3.7	孔径1.2-1.6	Dc、c②酸化③褐色④胎口部	長さ78.69g
122	表土	土鉢	長さ7.6	幅3.5	孔径1.2-1.4	Dc、a、c②酸化③赤褐色④胎口部	長さ91.69g
123	G-5	土鉢	長さ9.4	幅4.4	孔径1.7-1.5	Dc②酸化③赤褐色④胎口部	胎縁に胎元とみられる胎縁の痕跡あり。長さ160.84g
124	E-4	土鉢	長さ7.8	幅3.8	孔径1.4	Dc、a、b②酸化③赤褐色④胎口部	長さ93.18g

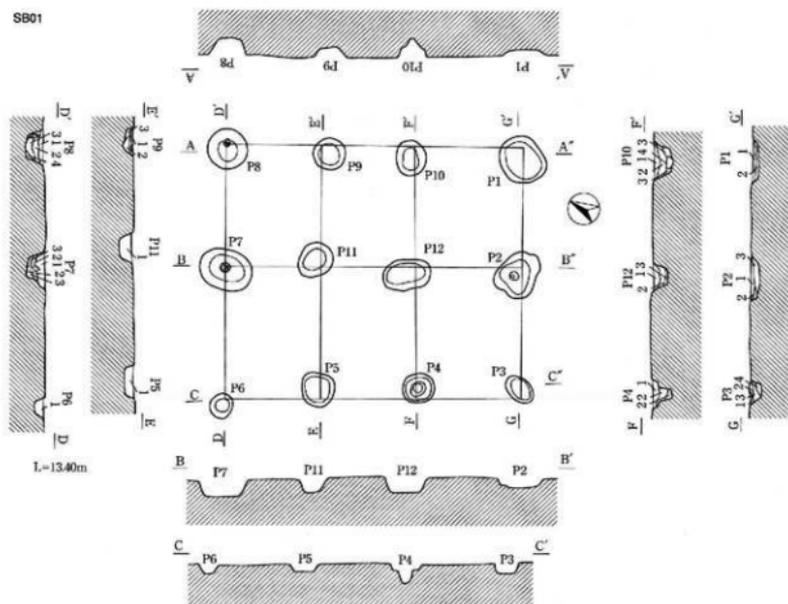
圖 面



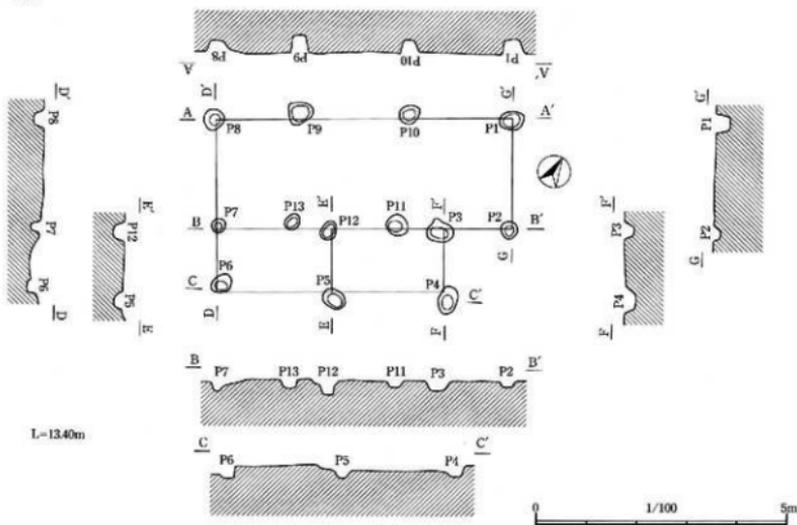
岩坪岡田島遺跡 平成16年度調査区全体図

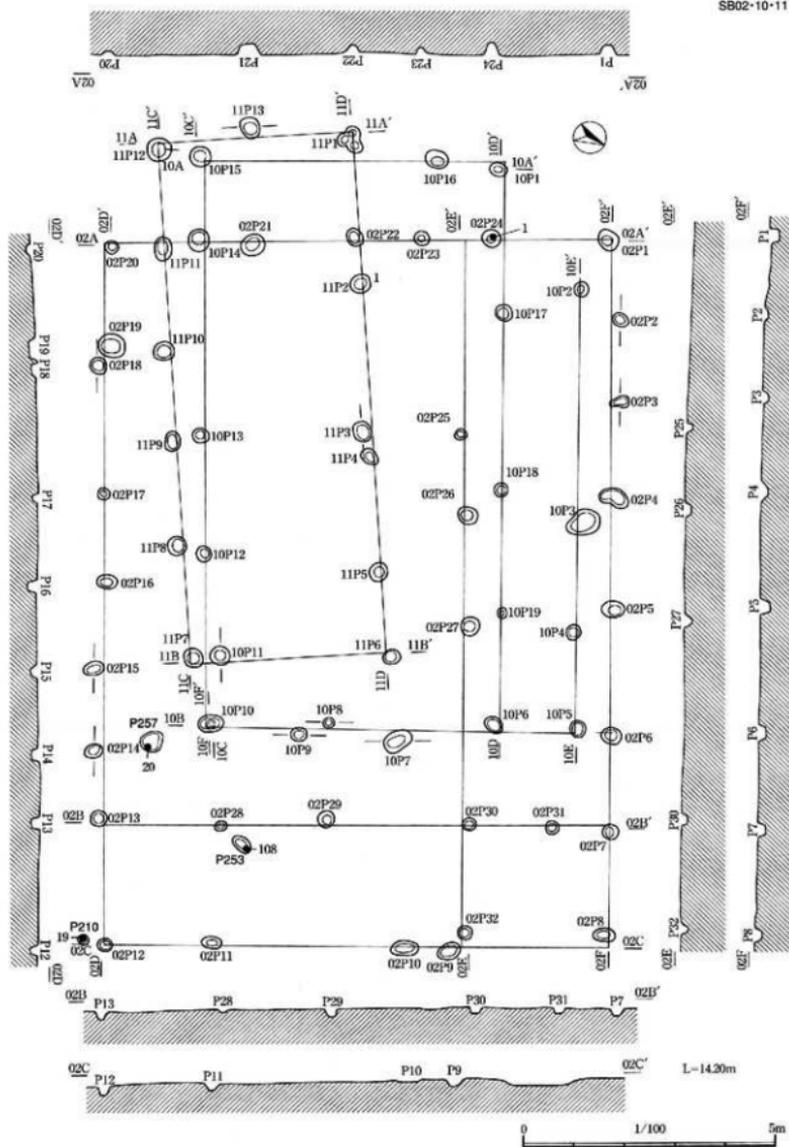


SB01

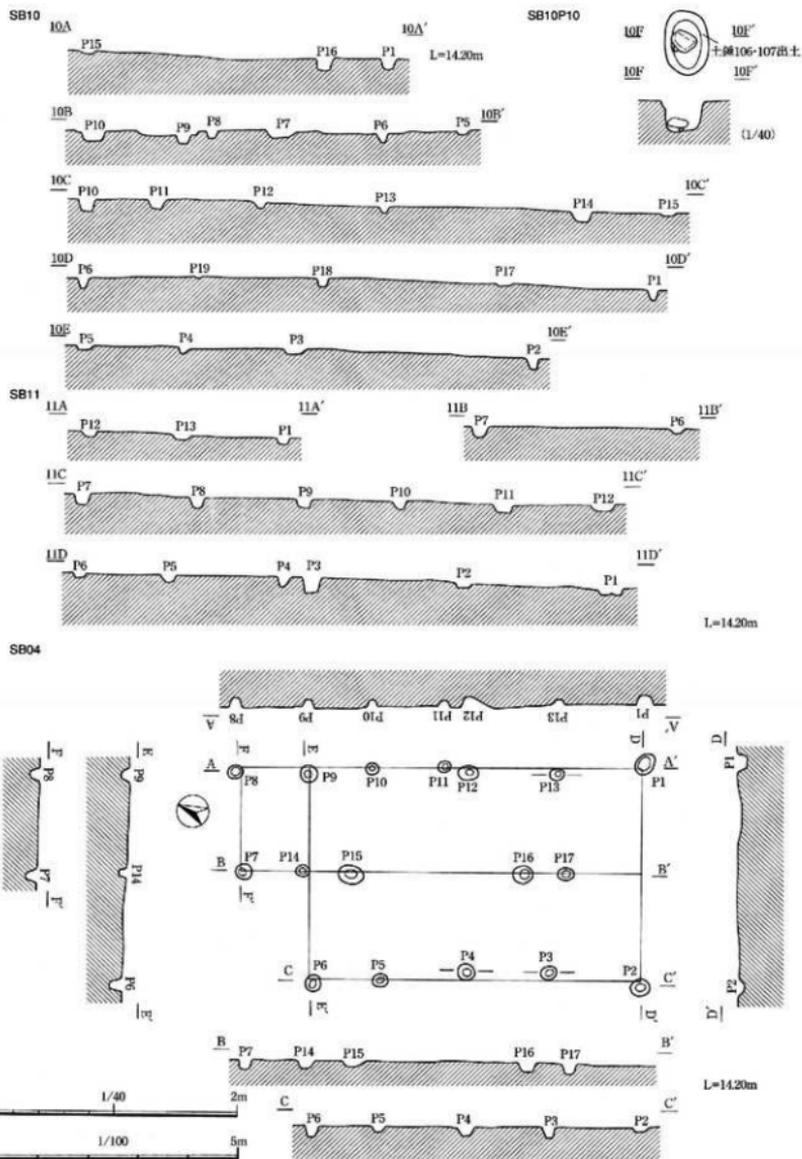


SB03



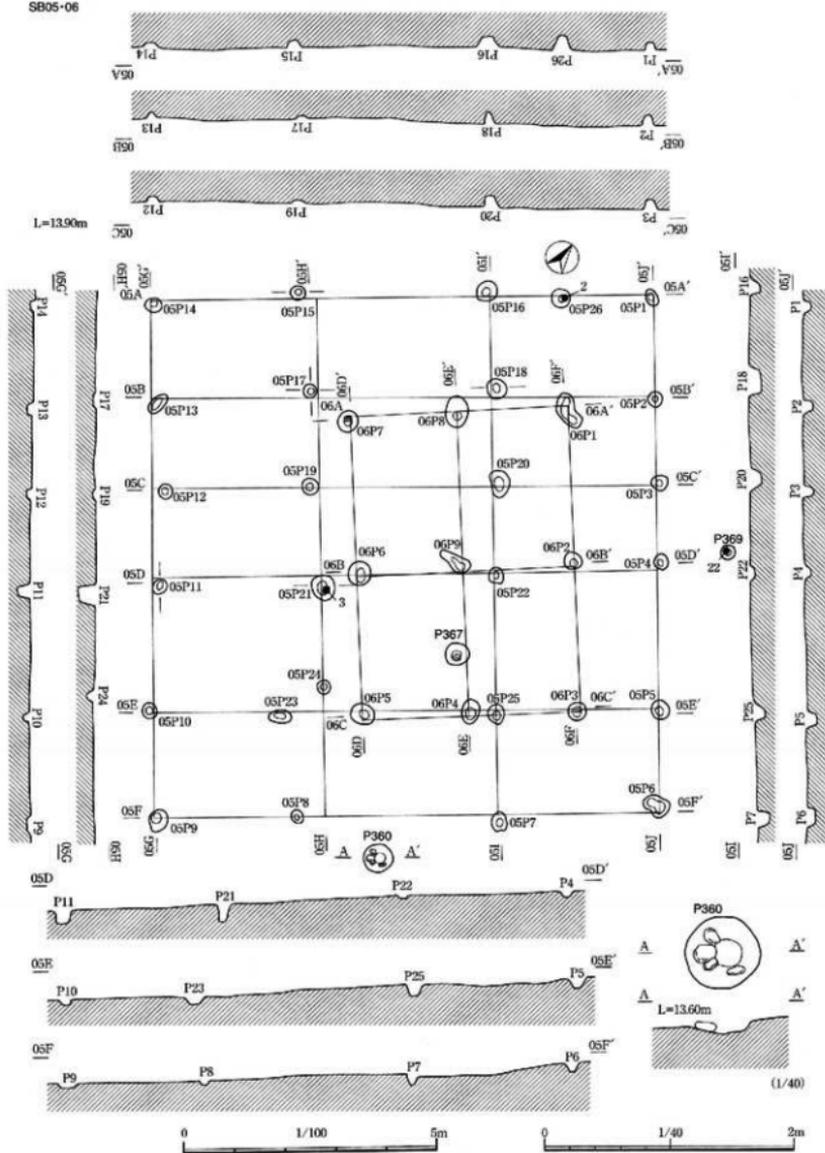


孤立柱建物SB02・10・11、小穴P210・253・257実測図

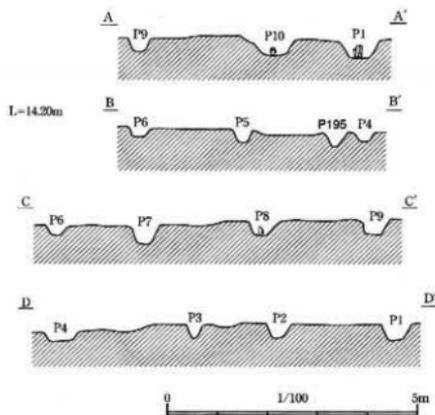
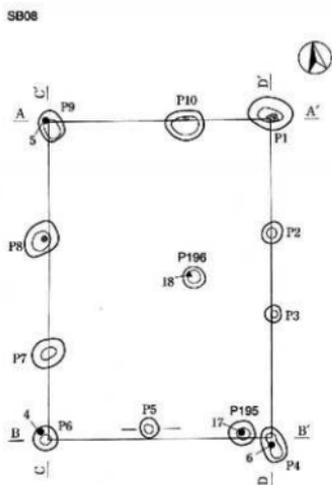
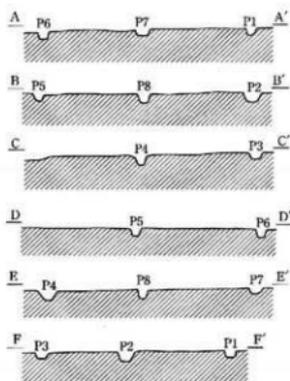
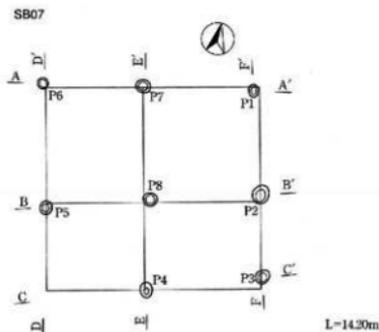
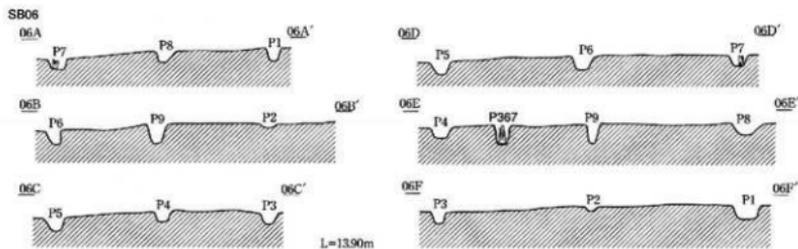


板立柱建物SB04・10・11実測図

SB05-06

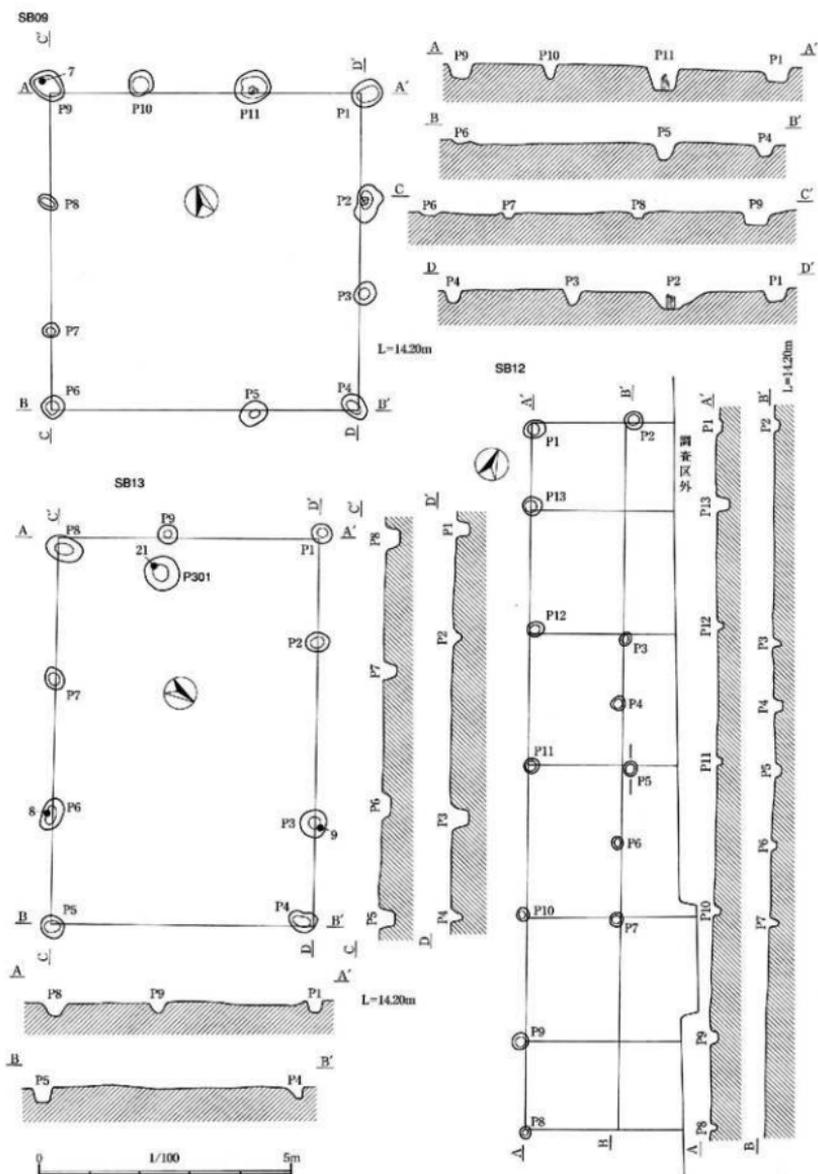


擬立柱建物SB05・06、小穴P360・367・369実測図

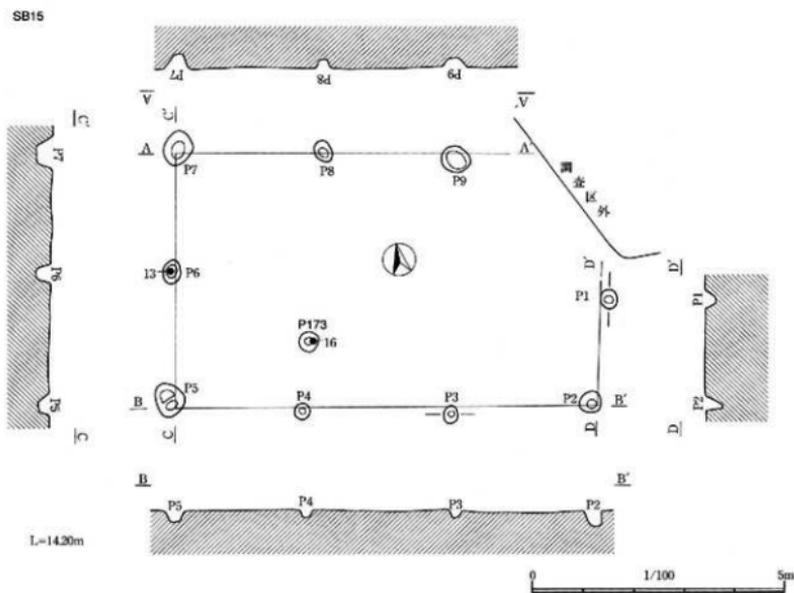
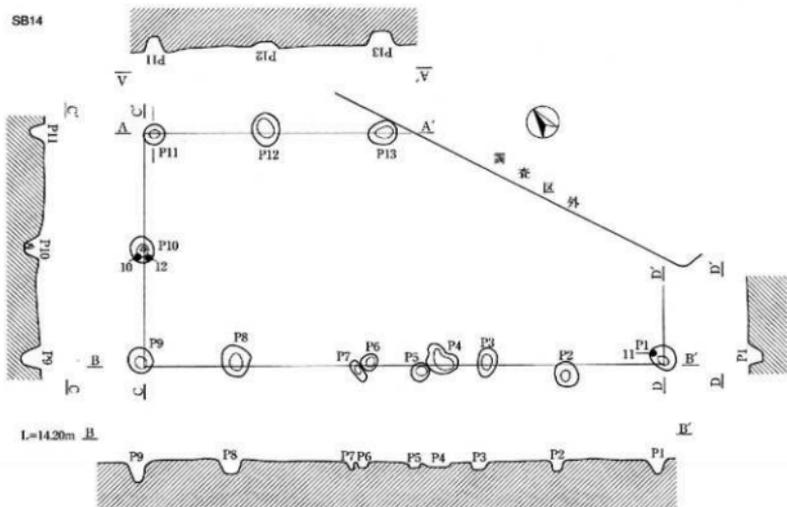


屋立柱建物SB06・07・08、小穴P195・196実測図

图面〇七 遺構実測図

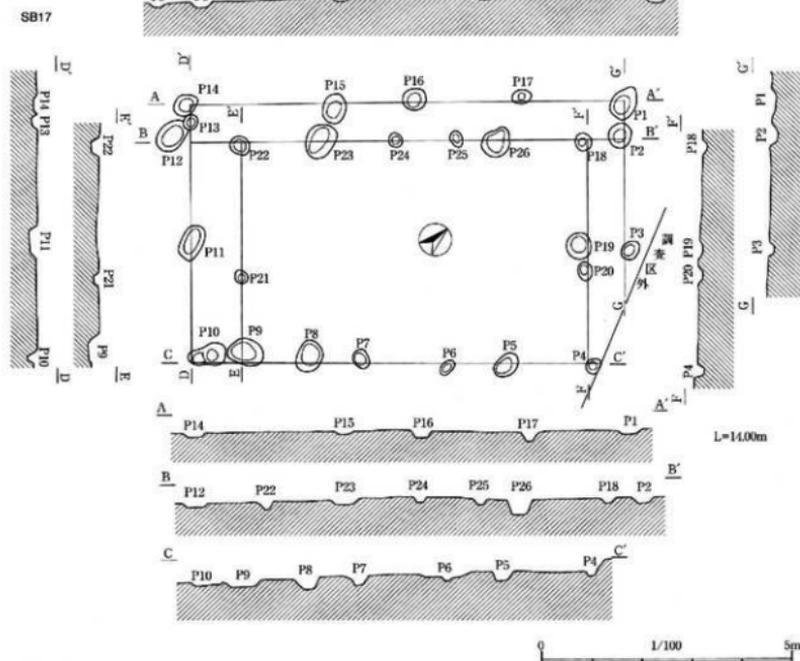
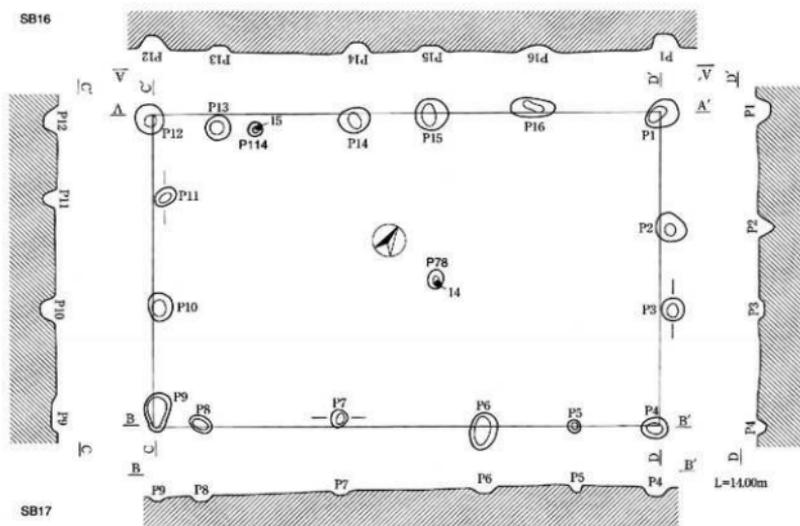


掘立柱建物SB09・12・13、小穴P301実測図

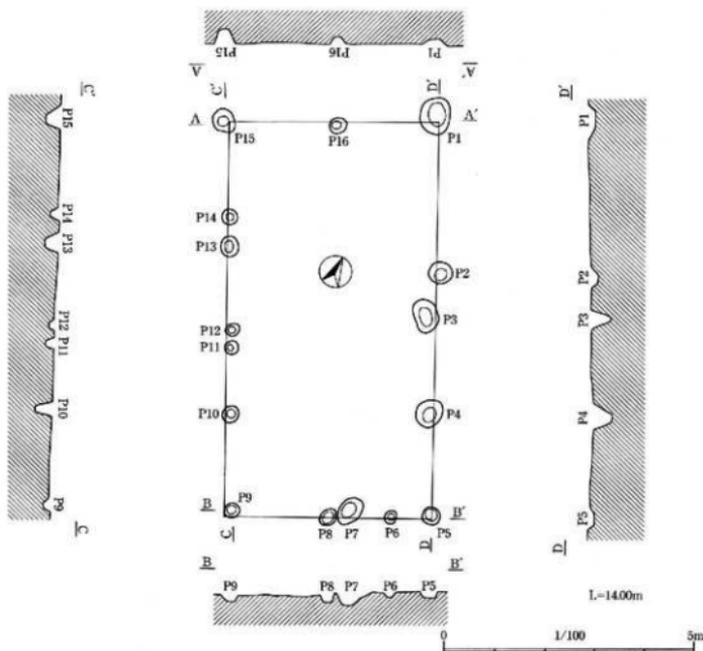
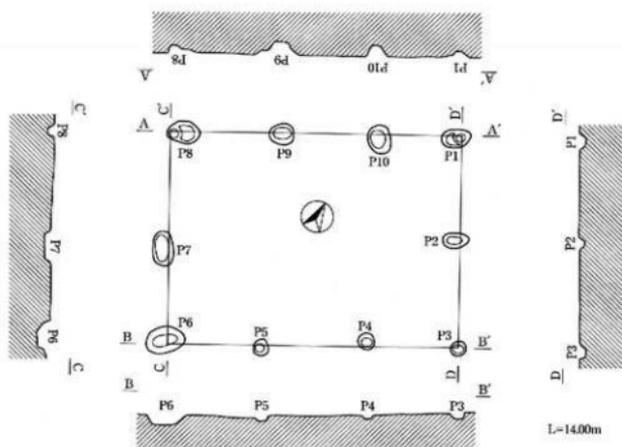


竪立住建物SB14・15、小穴P173実測図

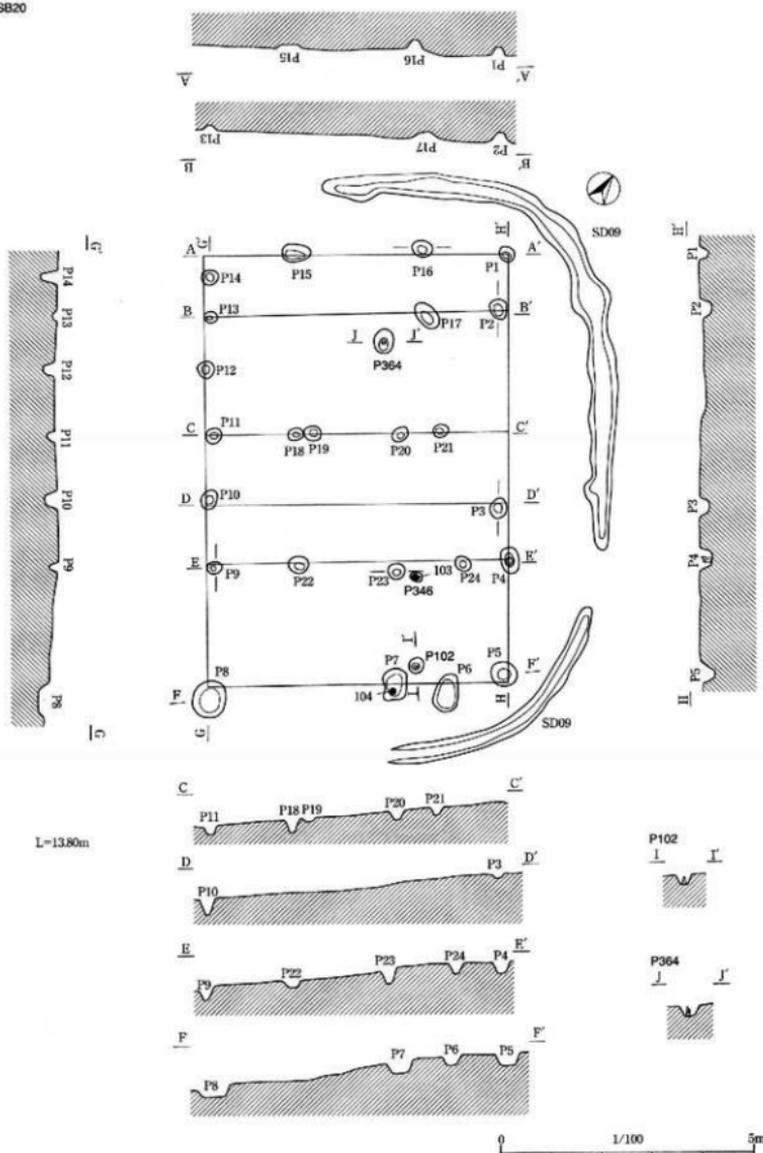
图面〇九 遺構実測図



竪立柱建物SB16・17、小穴P78・114実測図

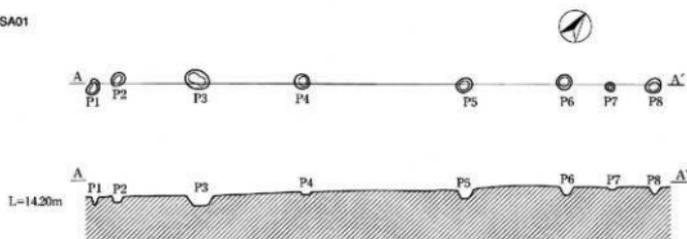


SB20

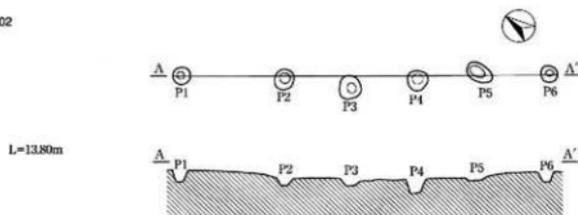


掘立柱建物SB20、小穴P102・346・364実測図

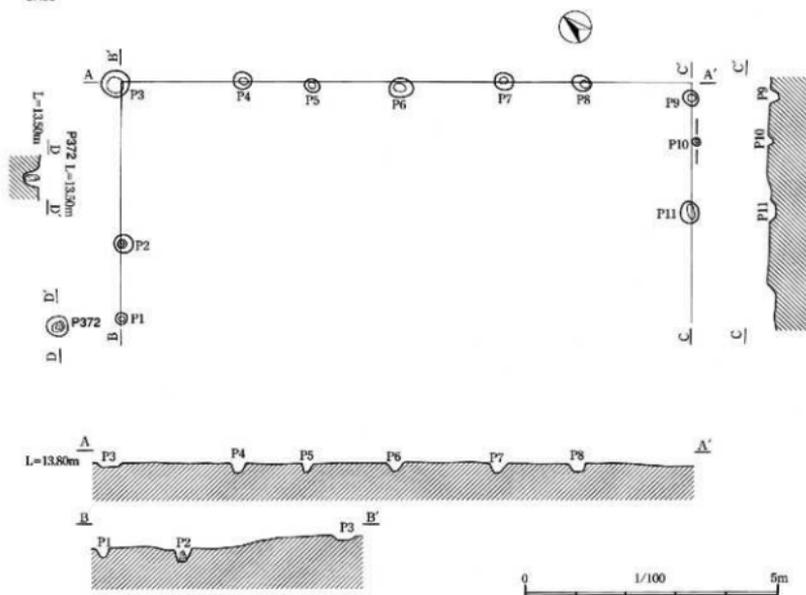
SA01



SA02

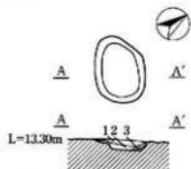


SA03



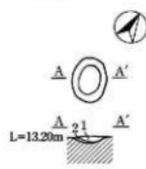
横列SA01・02・03、小穴P372実測図

SK01



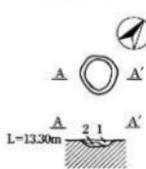
- SK01
1. 暗褐色粘質土 径2～5mm大の炭塊を1%程含む。
 2. 黒褐色粘質土 他層より粘性強く、径5～10mm大の炭塊を2～3%含む。
 3. 暗褐色粘質土 径5～10mm大の灰黄褐色砂質土塊を5～10%含む。

SK02



- SK02
1. 黒褐色粘質土 他層より粘性強く、径5～10mm大の炭塊を2～3%含む。
 2. 暗褐色粘質土 径2～5mm大の炭塊を1%程含む。

SK03



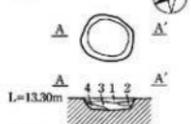
- SK03
1. 灰黒色粘質土 他層より粘性強く、径5～10mm大の炭塊を2～3%含む。
 2. 暗褐色粘質土 径2～5mm大の炭塊を1%程含む。

SK04



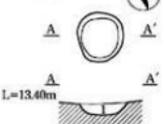
- SK04
1. 黒褐色粘質土 径10～30mm大の灰黄褐色砂質土塊を2～3%含む。
 2. 褐灰色粘質土 径5～10mm大の炭塊を2～3%含む。
 3. 灰褐色砂質土 径5～10mm大の黒褐色粘質土塊を5～10%含む。

SK05



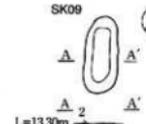
- SK05
1. 灰黒色粘質土 径10～30mm大の灰黄褐色砂質土塊を2～3%含む。
 2. 黒褐色粘質土 径5～10mm大の炭塊を2～3%含む。
 3. 暗褐色粘質土 他層より粘性強く、径2～5mm大の炭塊を1%程含む。
 4. 褐灰色砂質土 径10～30mm大の灰黄褐色砂質土塊を5～10%含む。

SK08



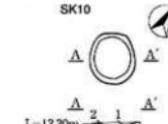
- SK08
1. 暗褐色粘質土 径5～10mm大の黒褐色粘質土塊を5～10%含む。

SK09



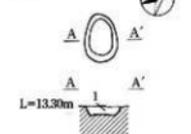
- SK09
1. 黒褐色粘質土 径5～10mm大の炭塊を2～3%含む。
 2. 褐灰色砂質土 径10～30mm大の黒褐色粘質土塊を5～10%含む。

SK10



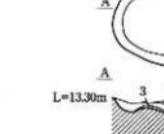
- SK10
1. 灰黒色粘質土 他層より粘性強く、径2～5mm大の炭塊を1%程含む。
 2. 黒褐色粘質土 径10～30mm大の灰黄褐色砂質土塊を5～10%含む。

SK11



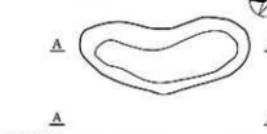
- SK11
1. 灰褐色砂質土 径5～10mm大の黒褐色粘質土塊を2～3%含む。

SK12



- SK12
1. 灰黒色粘質土 他層より粘性強く、径2～5mm大の炭塊を1%程含む。
 2. 暗褐色粘質土 径10～30mm大の灰黄褐色砂質土塊を5～10%含む。
 3. 暗褐色土 径5～10mm大の黒褐色粘質土塊を2～3%含む。

SK13



- SK13
1. 灰黒色粘質土 径10～30mm大の灰黄褐色砂質土塊を2～3%含む。
 2. 黒褐色粘質土 径5～10mm大の炭塊を2～3%含む。
 3. 暗褐色粘質土 径5～10mm大の黒褐色粘質土塊を5～10%含む。

SK16



- SK16
1. 暗褐色粘質土 径2～5mm大の炭塊を1%程含む。
 2. 暗褐色土 明黄褐色砂質土を2～3%含む。

SK15

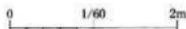


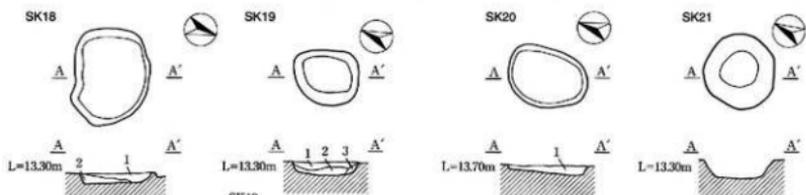
- SK15
1. 暗褐色粘質土 径2～5mm大の炭塊を1%程含む。
 2. 暗褐色土 明黄褐色砂質土を2～3%含む。

SK17



- SK17
1. 黒褐色粘質土 径2～5mm大の炭塊を2～3%含む。
 2. 暗褐色土 明黄褐色砂質土を2～3%含む。





SK18

1. 黒褐色粘質土 径2~5mm大の炭塊を1%含む。
2. 暗褐色土 明黄褐色砂質土を2~3%含む。

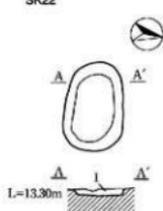
SK19

1. 黒褐色粘質土 灰黄褐色砂質土をラミナ状に5~10%含む。
2. 暗褐色土 径5~10mm大の黒褐色粘質土塊を5~10%含む。
3. 灰黄褐色砂質土 黒褐色粘質土塊を2~3%含む。

SK20

1. 暗褐色土 明黄褐色砂質土を2~3%含む。

SK22



SK22 (図面14)

1. 褐灰色砂質土 径5~10mm大の黒褐色粘質土塊を5~10%含む。

SK23



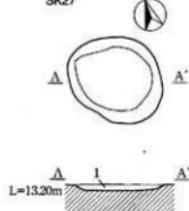
SK23

1. 暗褐色土 明黄褐色砂質土を2~3%含む。
2. にぶい黄褐色砂質土 径5~10mm大の黒褐色粘質土塊を5~10%含む。

SK26



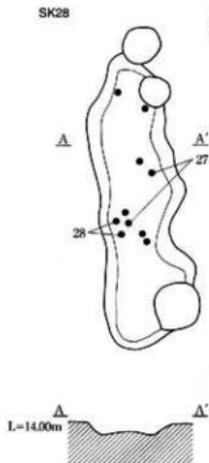
SK27



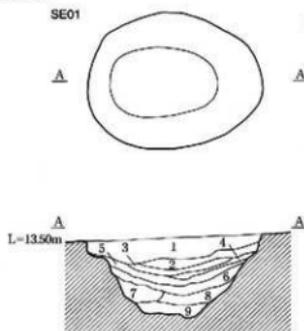
SK27

1. 灰褐色砂質土 径5~10mm大の黒褐色粘質土塊を5~10%含む。

SK28



SE01

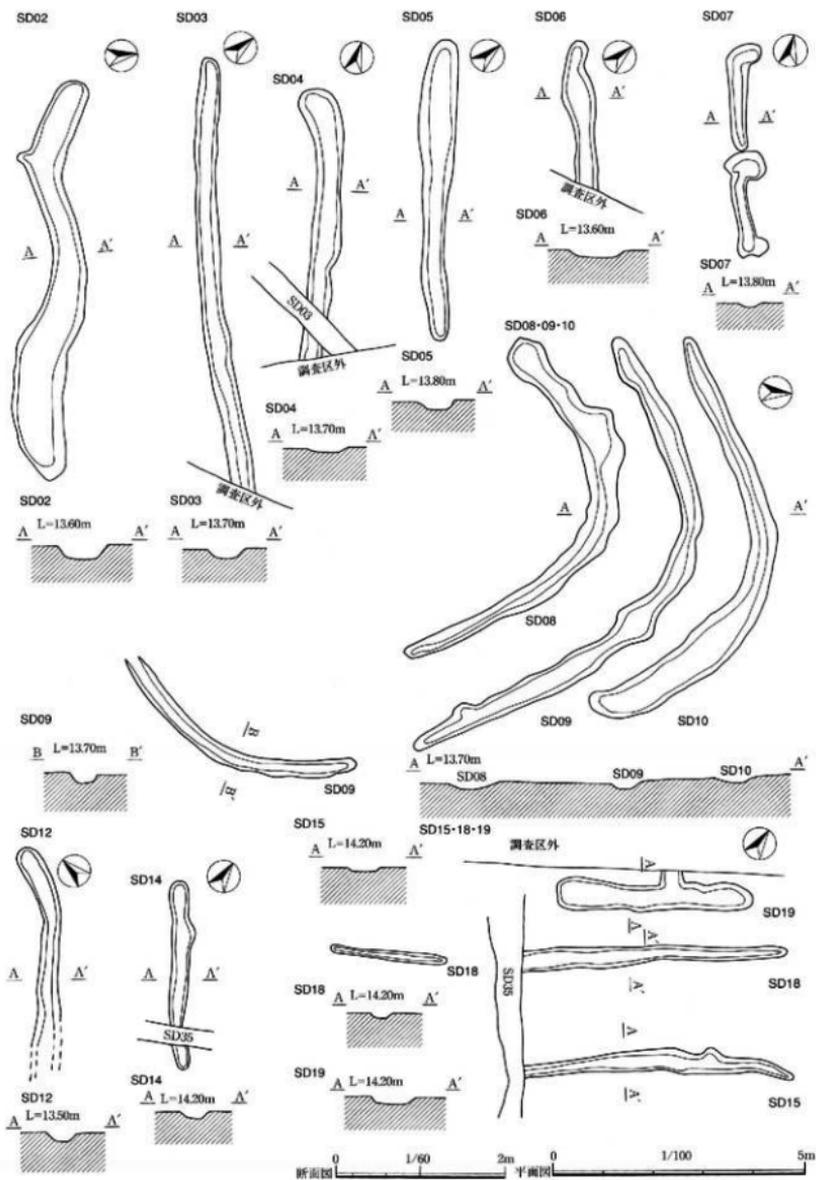


SE01

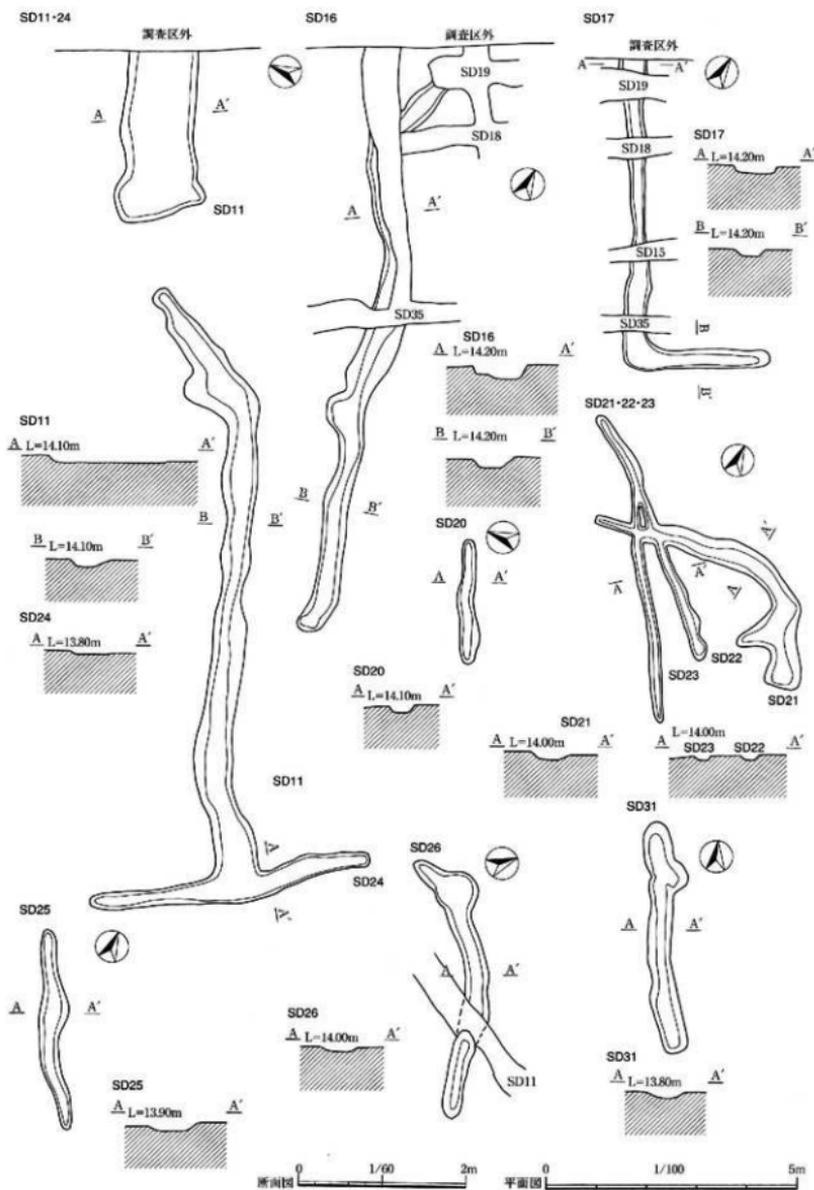
1. 暗褐色砂質土 径5~10mm大の炭塊を2~3%含む。
2. 暗褐色粘質土
3. 黒褐色粘質土 明黄褐色砂質土を2~3%含む。
4. 暗褐色砂質土
5. 黒褐色粘質土 径2~5mm大の炭塊を1%含む。
6. 灰黒色砂質土
7. 暗褐色粘質土 灰色砂質土をラミナ状に5~10%含む。
8. 黒褐色粘質土 径5~10mm大の炭塊を2~3%含む。トナの実、板材出土。
9. 暗褐色砂質土

0 1/60 2m

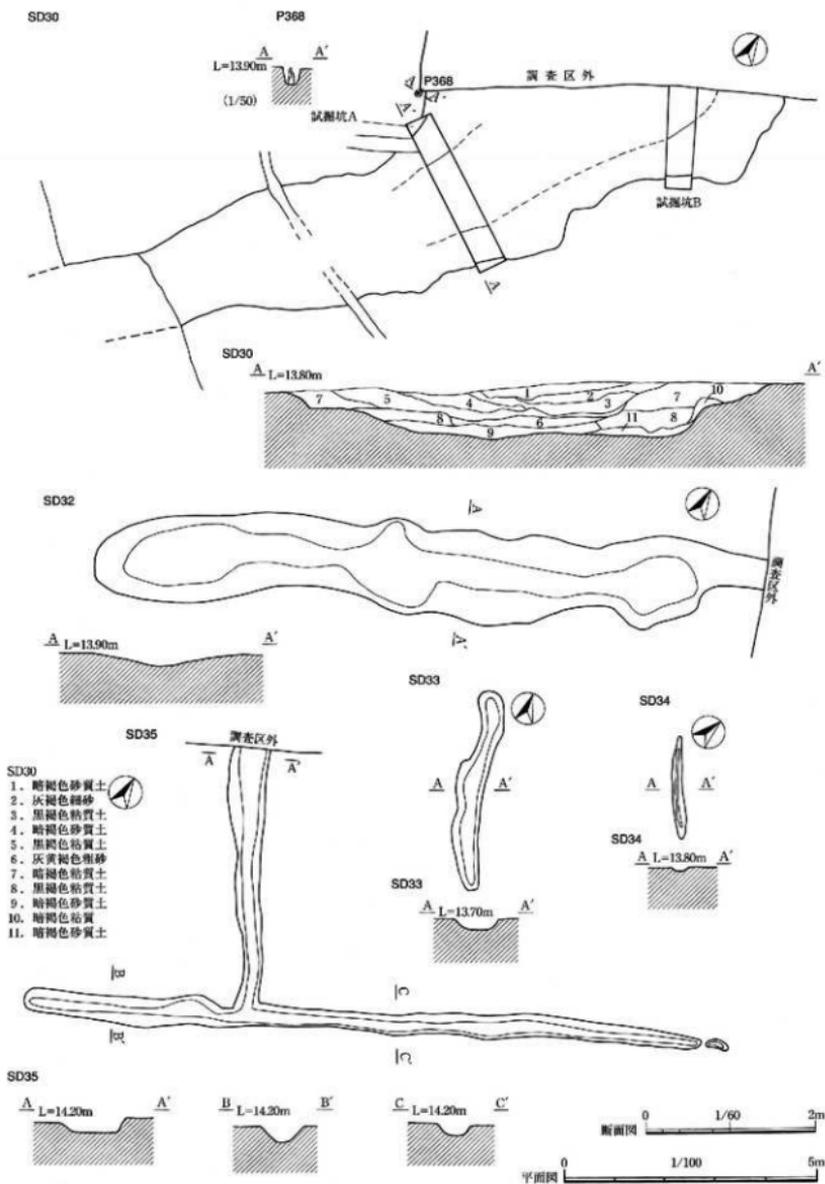
图面一五 遺構実測図



溝SD02-10・12・14・15・18・19実測図



溝SD11・16・17・20~26・31実測図

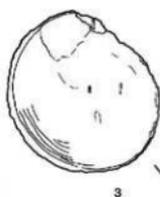
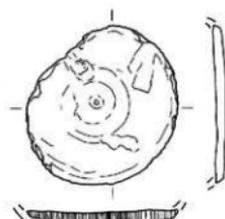
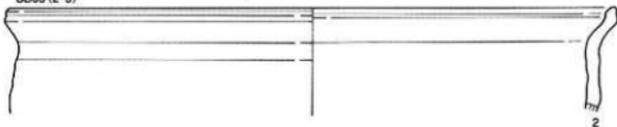


遺SD30・32-35、小穴P368實測圖

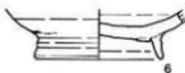
SB02(1)



SB05(2-3)



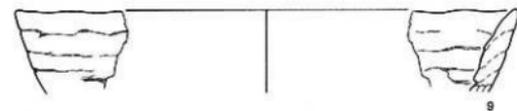
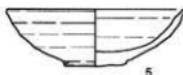
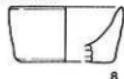
SB06(4-6)



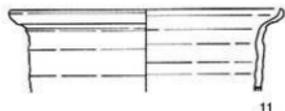
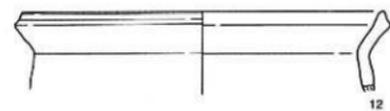
SB08(7)



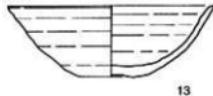
SB13(8-9)



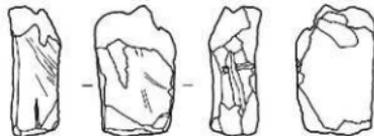
SB14(10-12)



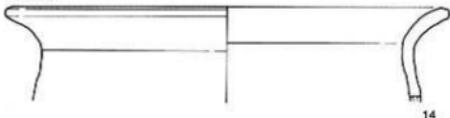
SB15(13)



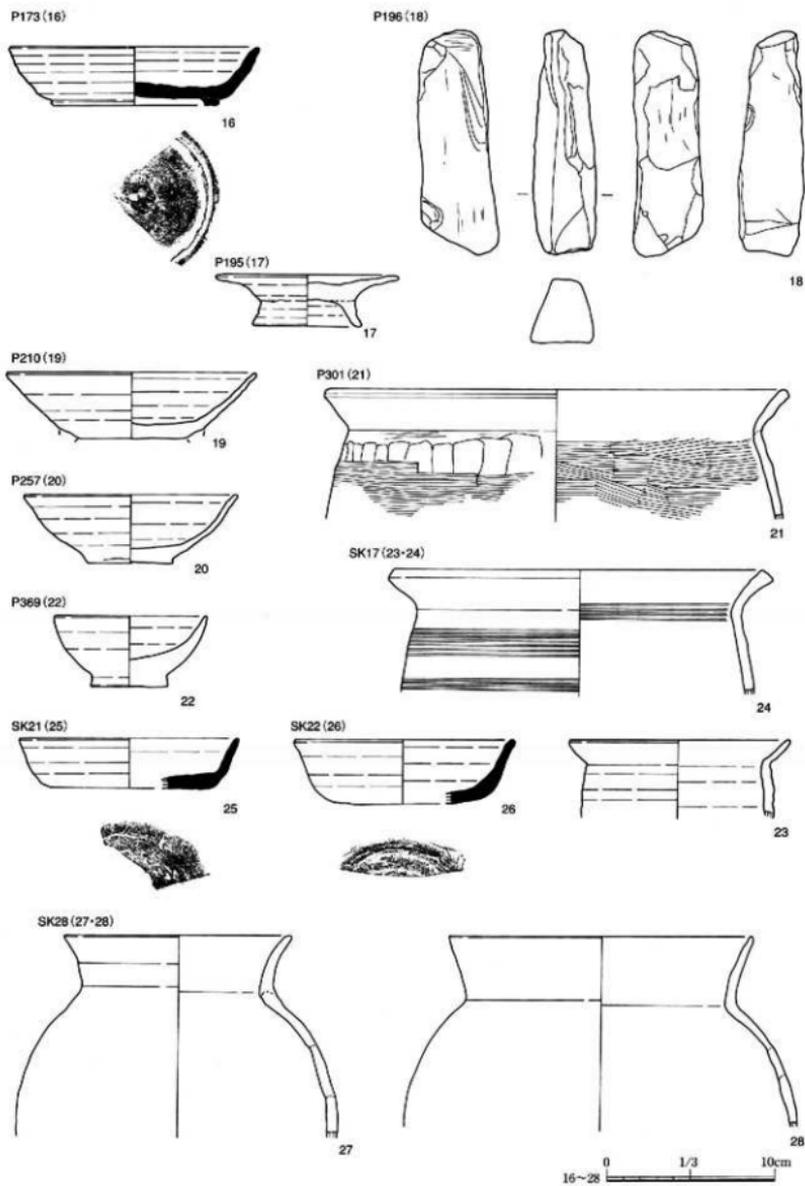
P114(15)



P78(14)

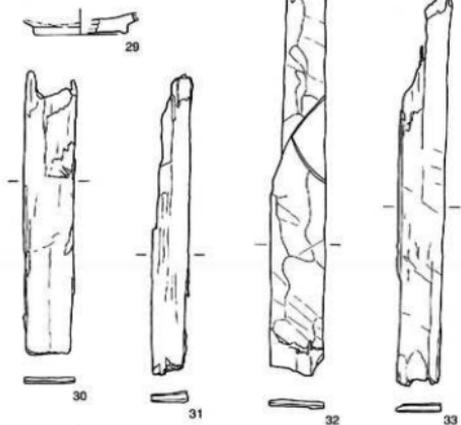


0 1/3 10cm
1~15

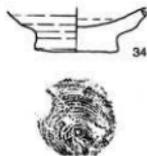


小穴P173・195・196・210・257・301・369、土坑SK17・21・22・28出土遺物

SE01 (29~33)



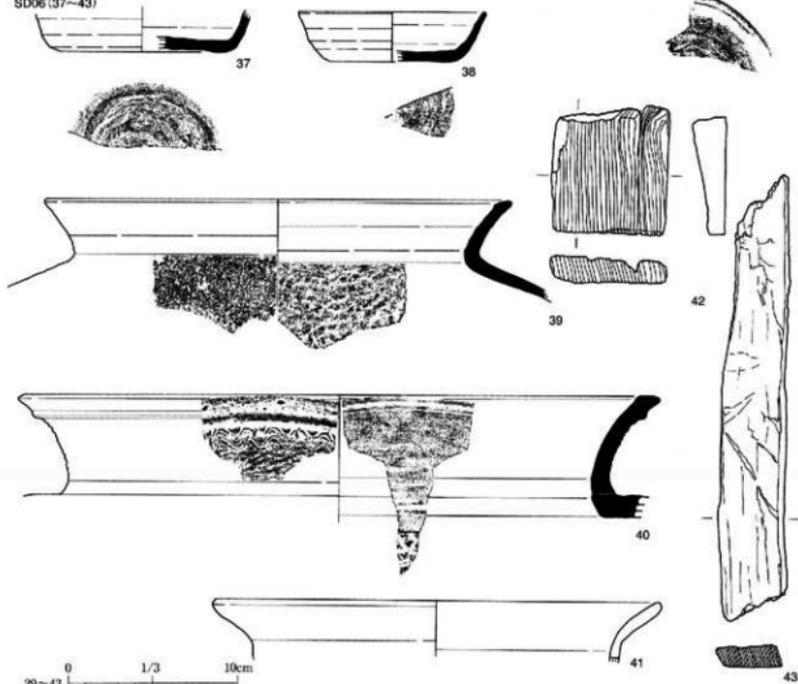
SD02 (34)



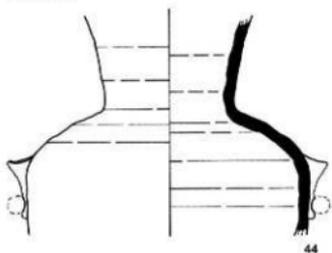
SD05 (35-36)



SD06 (37-43)

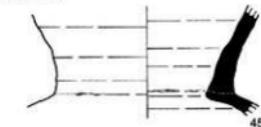


SD09 (44)

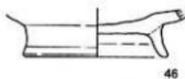


44

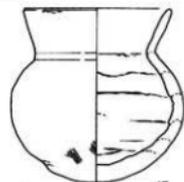
SD11 (45~47)



45

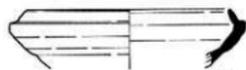


46

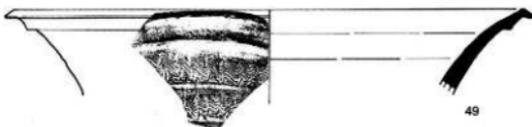


47

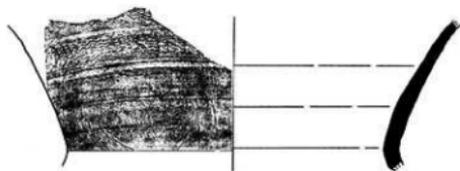
遺物包含層、表土層 (48~57)



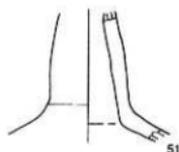
48



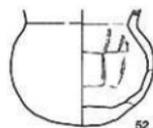
49



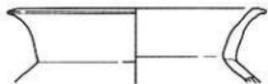
50



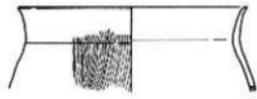
51



52



53



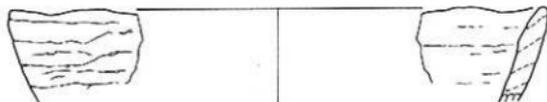
54



55



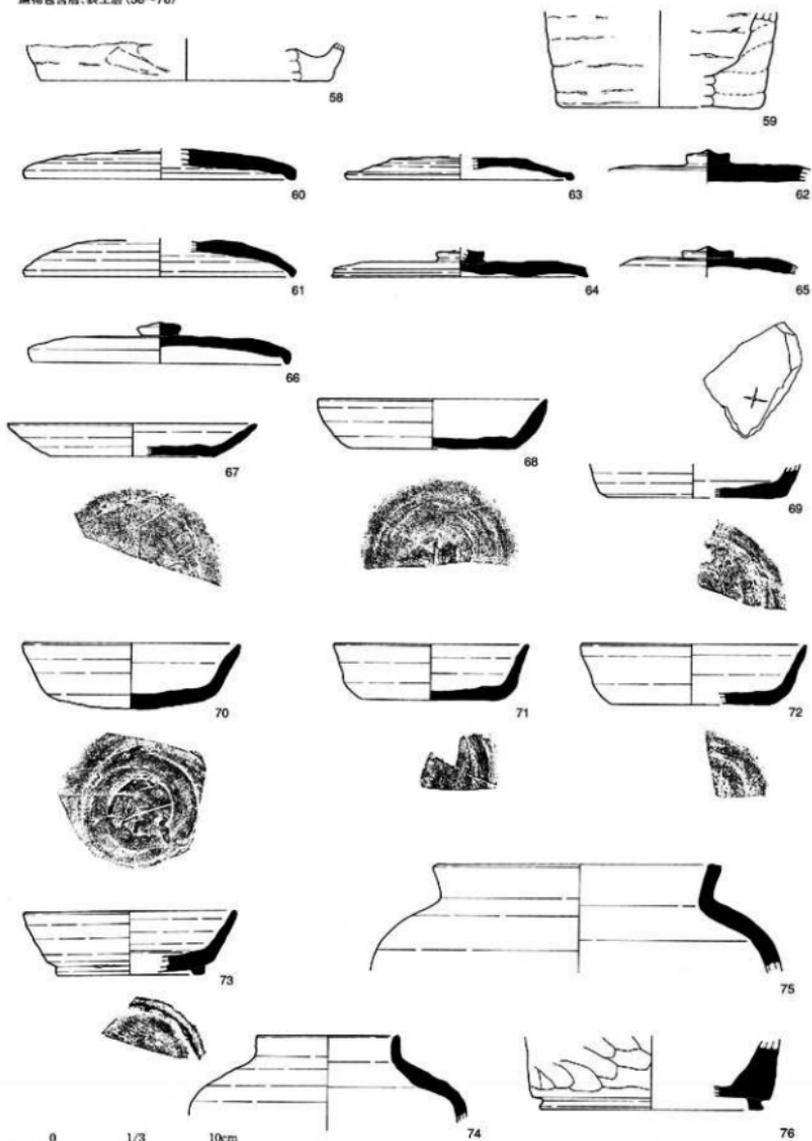
56



57

0 1/3 10cm

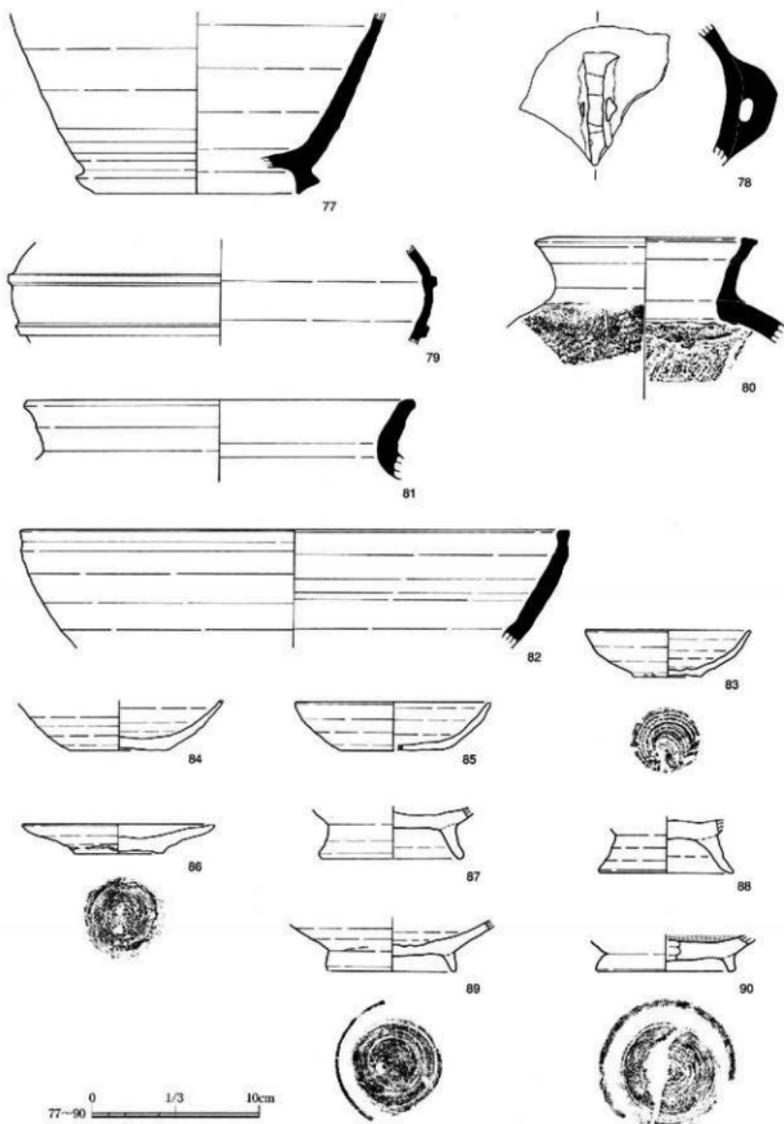
遺物包含層、表土層 (58~76)



0 1/3 10cm

遺物包含層、表土層出土遺物

遺物包含層、表土層(77~90)



遺物包含層、表土層出土遺物

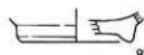
遺物包含層、表土層 (91~102)



91



92



93



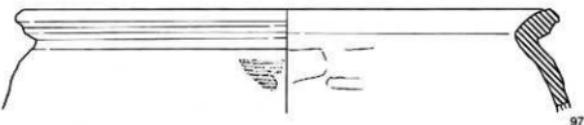
94



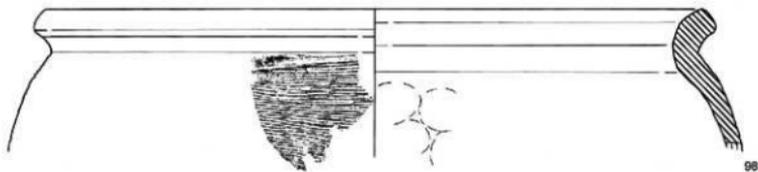
95



96



97



98



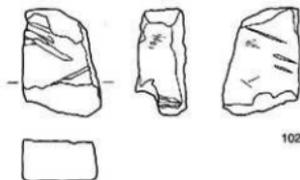
99



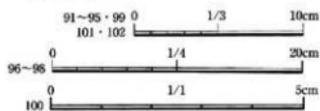
100



101

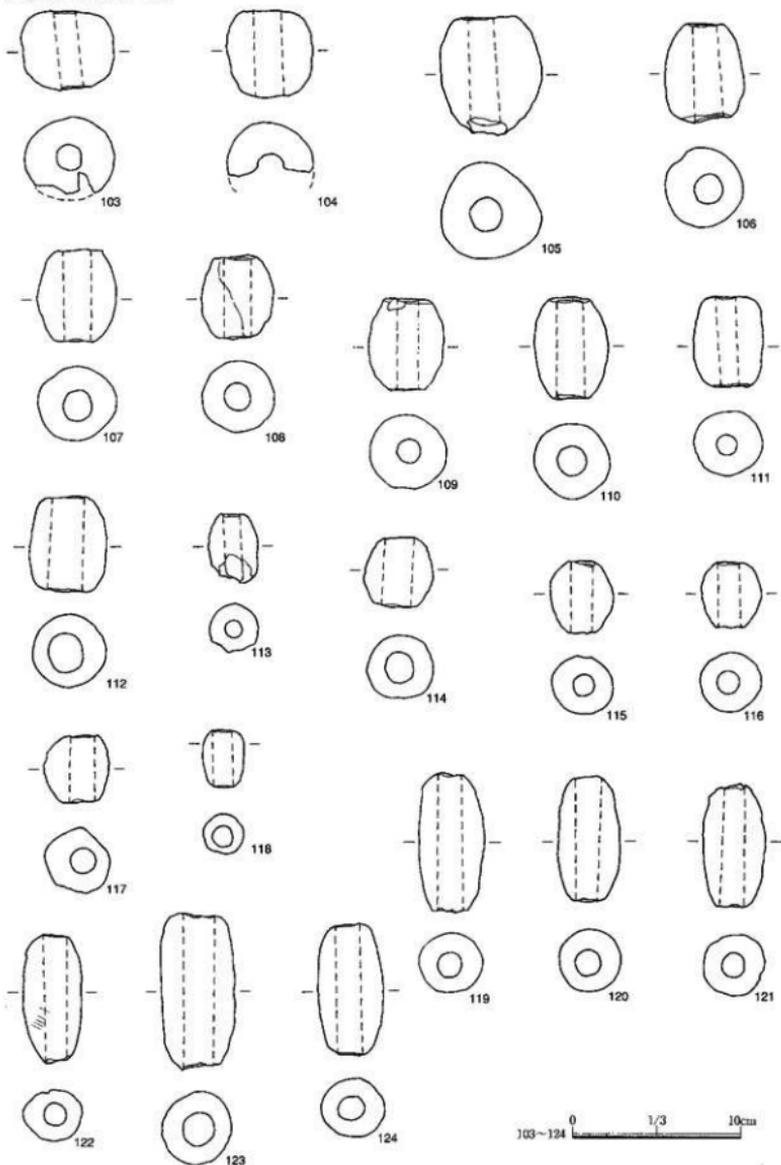


102



遺物包含層、表土層出土遺物

遺跡内出土 土鏡 (103~124)



遺跡内出土土鏡 (独立柱建物SB10P10, SB30P7、小穴P253・346、上坑SK22、溝SD02・11、遺物包含層、表上層)

圖 版



遺跡全景（上空から）

※当写真は3回に分けて撮影したものを合成したものである。



1. 遺跡遠景 (南東上空から)



2. 掘立柱建物 SB01 突棚状況 (北から)



1. 掘立柱建物 SB02 完掘状況 (東から)



2. 掘立柱建物 SB03 完掘状況 (東から)



1. 掘立柱建物 SB04 発掘状況（北から）



2. 掘立柱建物 SB05・06 発掘状況（北から）



1. 掘立柱建物 SB07 完掘状況 (北から)



2. 掘立柱建物 SB10・11 完掘状況 (東から)



1. 掘立柱建物 SB16・19 完掘状況 (東から)



2. 掘立柱建物 SB20、櫛列 SA02・03 完掘状況 (北から)



1. 掘立柱建物SB10 柱穴 P10
遺物出土状況 (東から)



2. 掘立柱建物SB14 柱穴 P10
柱根出土状況 (東から)



3. 小穴 P360 礫石出土状況
(北から)



1. 小穴 P196 遺物 (17)
出土状況 (北から)



2. 井戸 SE01 土層堆積断面
(南から)



3. 井戸 SE01 完掘状況
(北から)



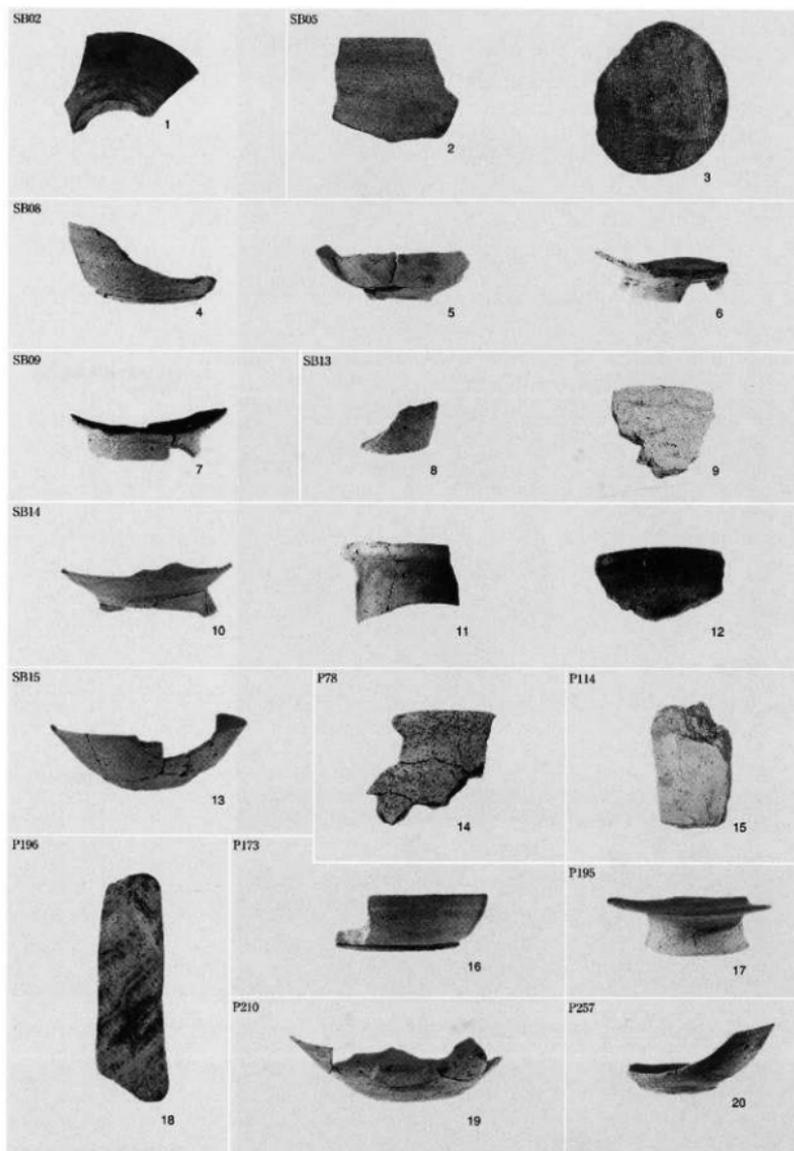
1. 土坑 SK28 遺物出土状況
(西から)



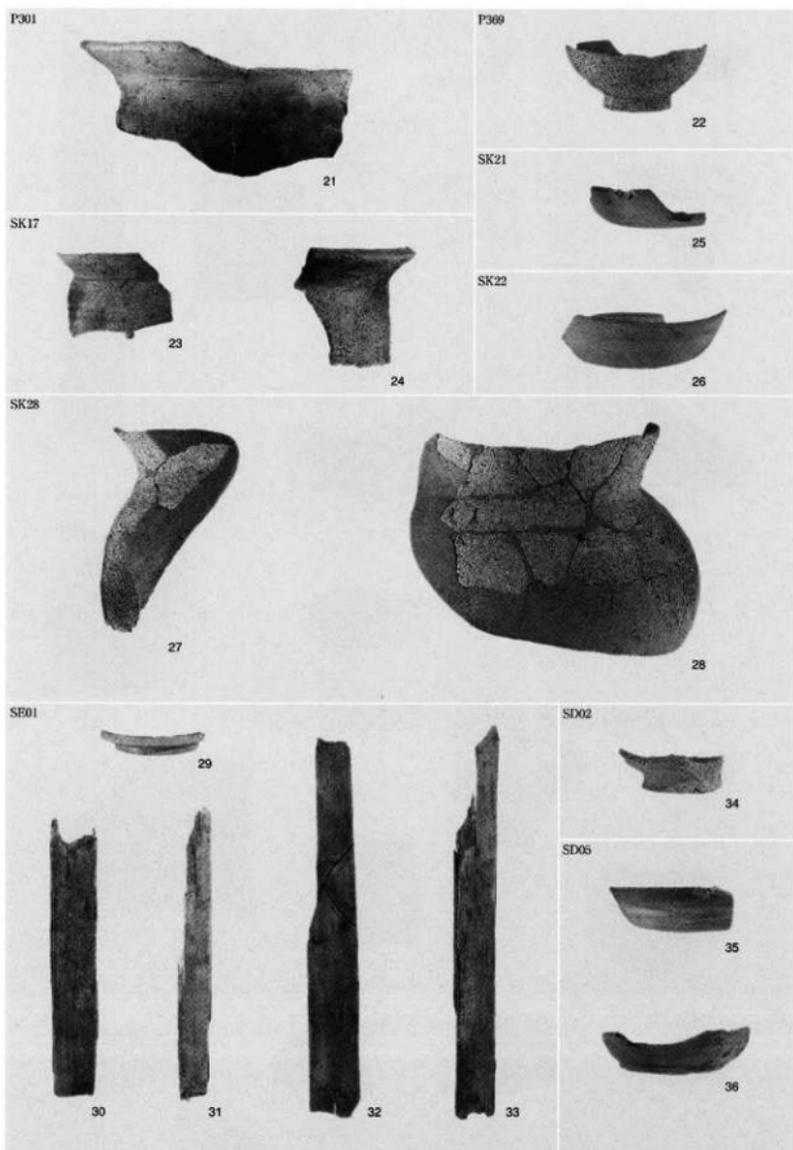
2. 掘立柱建物 SB01
発掘調査状況 (東から)



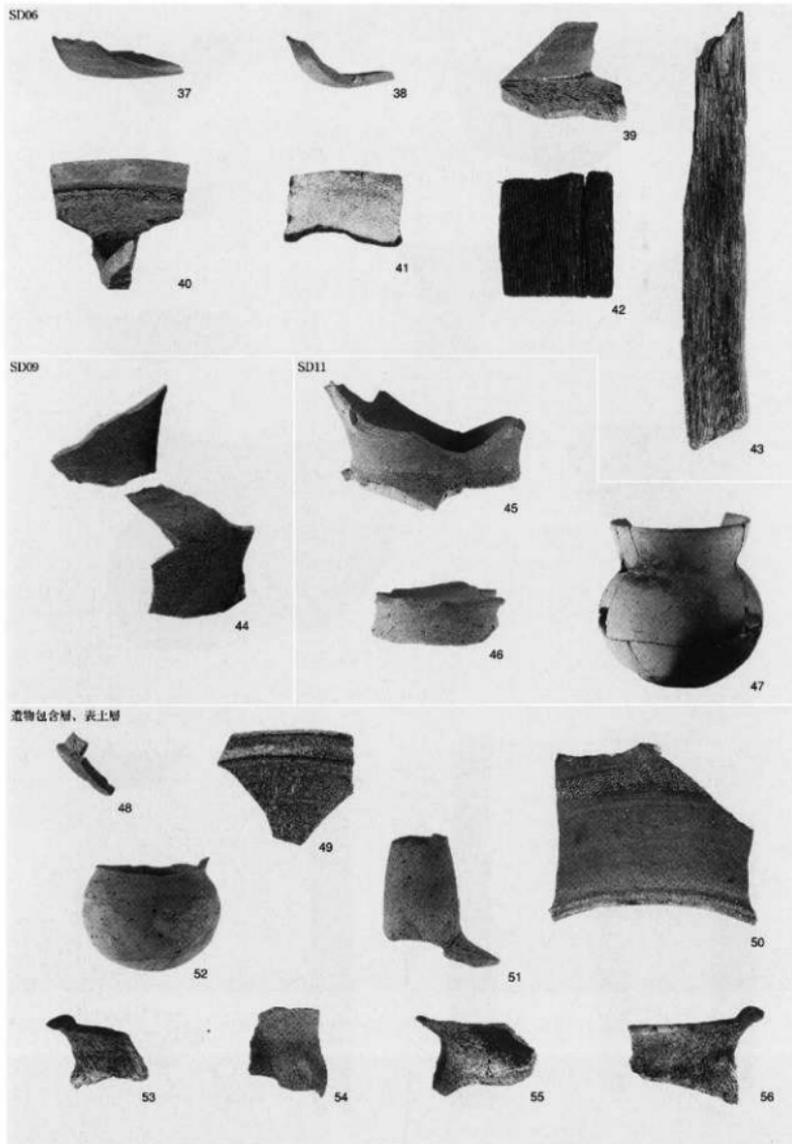
3. 掘立柱建物 SB02
発掘調査状況 (南から)



竪立柱建物 SB02・05・08・09・13・14・15、小穴 P78・114・173・195・196・210・257 出土遺物

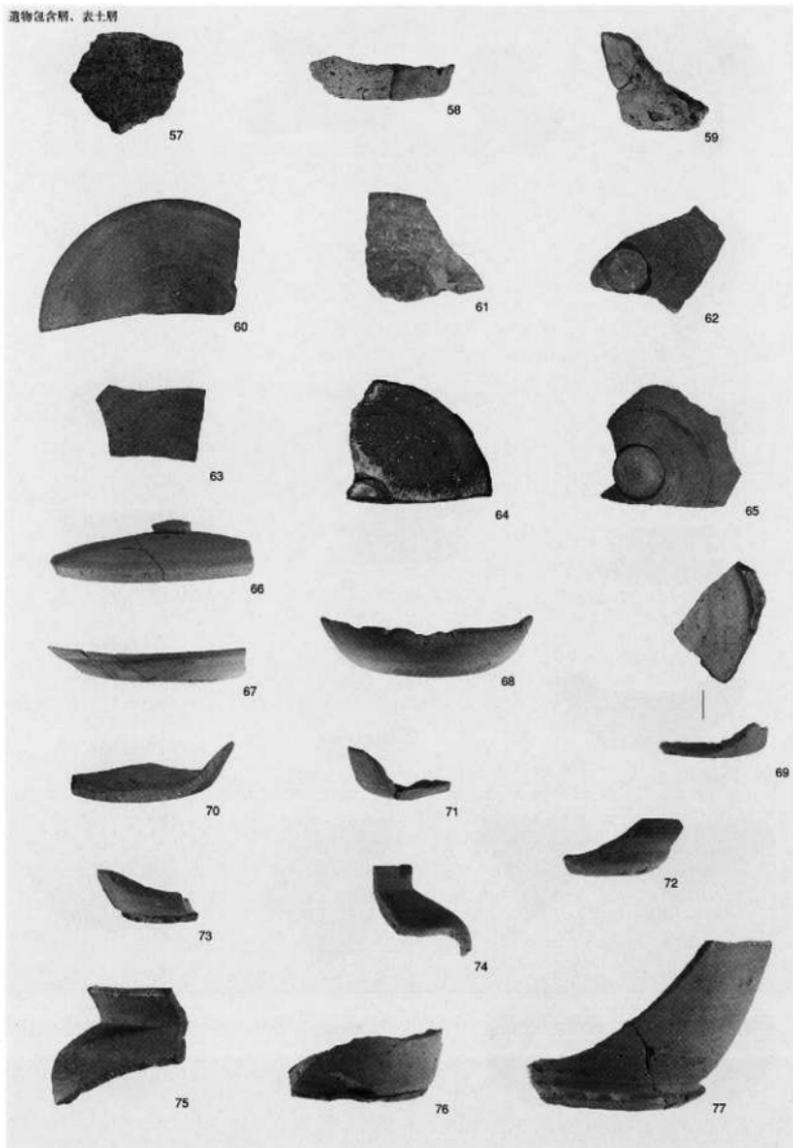


小穴 P301・369、土坑 SK17・21・22・28、井戸 SE01、溝 SD02・05 出土遺物



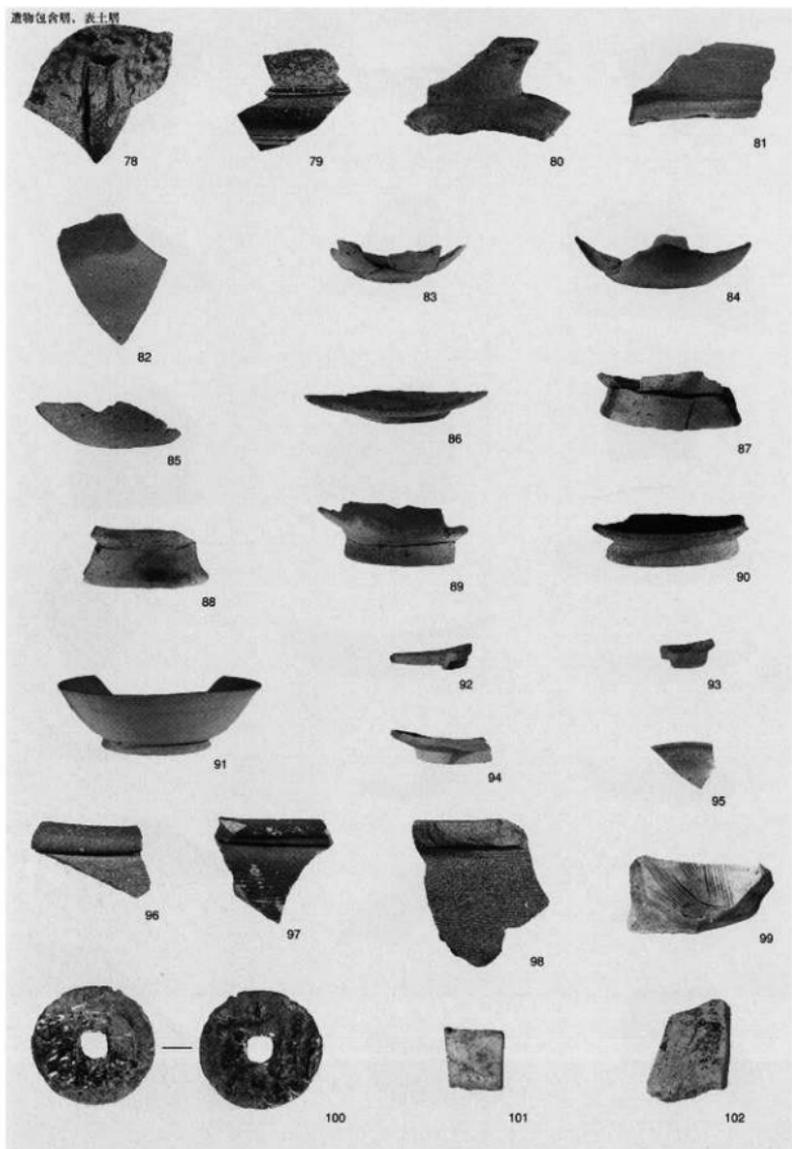
溝 SD06・09・11、遺物包含層、表上層出土遺物

遺物包含層、表土層



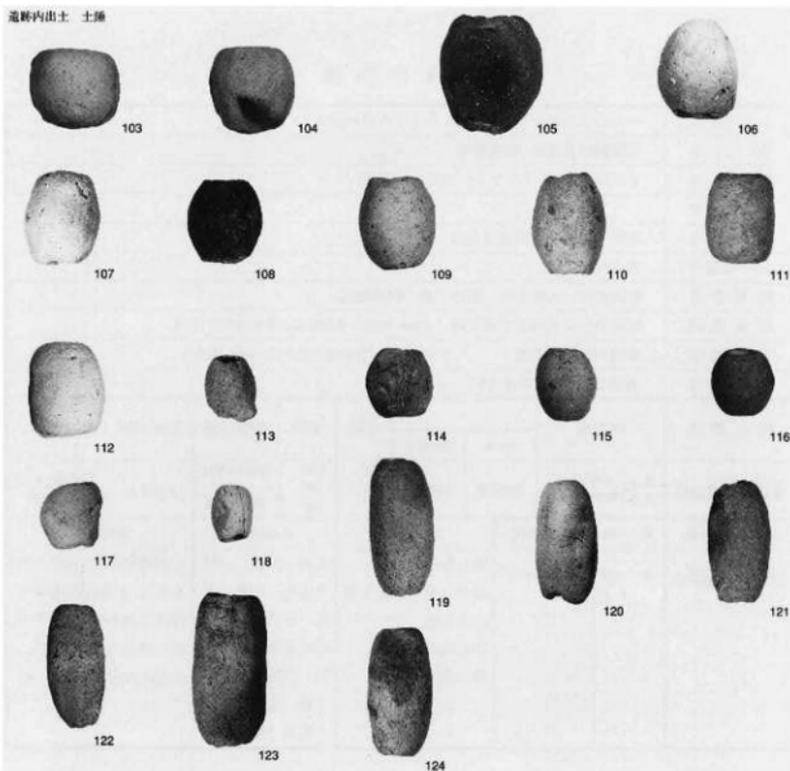
遺物包含層、表土層出土遺物

遺物包含層、表土層

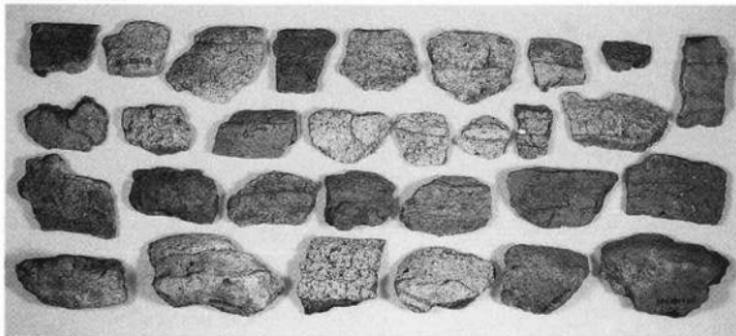


遺物包含層、表土層出土遺物

遺跡内出土 土錘



遺跡内出土 製塩土器



遺跡内出土土錘（掘立柱建物 SB10P10、SB20P7、小穴 P253・346、上坑 SK22、溝 SD02・11、遺物包含層、表上層）及び製塩土器

報告書抄録

ふりがな	いわつぼおかだじまいせき ちょうさがいほう							
書名	岩坪岡田島遺跡 調査概報							
副書名	平成16年度、グラスキューブ地区の調査							
巻次								
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査概報							
シリーズ番号	第63冊							
編著者名	武部喜充 大橋忠昭 榎谷 徳 根津明義							
編集機関	有限会社山武考古学研究所 〒286-0045 千葉県成田市並木町221番地							
発行機関	高岡市教育委員会 〒933-8601 富山県高岡市広小路7番50号							
発行年月日	西暦2005年(平成17年)3月31日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
岩坪岡田島遺跡	富山県高岡市 国古1913地22筆	016202	202074	36° 45' 4"	136° 58' 28"	20040809 ～ 20041106	4,453㎡	事務棟及び 倉庫の建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
岩坪岡田島遺跡	集落	古墳～中世	掘立柱建物20棟 横列3条 非戸1基 土坑23基 小穴300余基 溝30条	古墳土師器 古代 土師器 中世土師 器 古代須恵器 灰釉陶器 緑釉陶 器 白磁 珠洲 土唾 古銭 磁石 木製品 製塩上器	本遺跡は、弥水貞三氏 らによる東大寺領須加 荘比定地の西方、また和 田一郎氏らの比定地に、 北接する位置にあたる。			

高岡市埋蔵文化財調査概報第63冊

岩坪岡田島遺跡調査概報

— 平成16年度、グラスキューブ地区の調査 —

2005年3月31日

発行者 高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路7番50号

印刷所 株式会社文化総合企画

千葉県富津市日立台1-23-12